福祉系大学経営者協議会

ソーシャルワーカーの“声”
プロジェクト
第３次派遣報告書

平成 25 年 11 月

ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト　第３次派遣報告書発刊によせて

福祉系大学経営者協議会復興支援委員会
委員長　遠藤洋二（関西福祉科学大学）

平成25年3月3日～7日、宮城県においては3回目となるフィールドワークを実施しました。

本プロジェクトの構想段階で、宮城県社会福祉士会の高橋事務局長にご相談申し上げたところ、「一緒にやりましょう」と心強い回答をいただき、プロジェクトは大きく前進することができました。手探りで始めた同プロジェクトも３回目を迎え、少しずつ形になってきたように思います。その意味においても、宮城県は本プロジェクトの原点ではないかと思っています。

本プロジェクトをスタートさせた時、沿岸部では膨大な崩れた家屋、瓦礫が残され、津波の生々しい爪痕が私たちの感情を揺さぶりました。震災から２年が経過し、被災地の様相も大きく変化してきました。瓦礫は撤去され雑草が生い茂り、一見すると広大な空き地が眼前に広がっていました。学生たちは時間をかけて歩き、雑草の下に隠れている津波被害の痕跡を発見し、人々の暮らしに思いを馳せました。東日本大震災に関するメディア報道も、最近では極端に少なくなり、「風化」が懸念される中、被災地に近づき考えることの意味を改めて確認しました。

ソーシャルワーカーの方々へのインタビューでは、拙い学生の質問に対して丁寧かつ熱心に応えていただきました。研究者の調査では聞けない内容にまで踏み込んだインタビューは、学生たちに大きな刺激を与えました。

フィールドワークの最終日には参加者全員でのグループ討議をしますが、一人ひとりがこの体験を時には涙を流しながら語ります。彼らは自らが選択しようとしている「ソーシャルワーカー」が誇れるキャリアであることを再認識し、同時に、東日本大震災で被災者支援を行ったソーシャルワーカーが、災害発生直後から「静かな専門性」を発揮していたことを確認していきました。

私は毎回このグループ討議の最後に、学生に問いかけます。

「あなたは災害支援におけるソーシャルワーカーの役割が見えましたか？」

「あなたはあんなソーシャルワーカーを目指そうとしますか？」

この２つの質問に対して、全員が手をあげ、自分たちが得たものを将来に生かしていこうとする決意を表明するとき、「現場の姿」が学生に与える強烈なメッセージを感じるのです。

本プロジェクトは、被災地で活動するソーシャルワーカーの姿を、その「想い」とともに社会に伝えていくミッションを、学生と教員が協働して行うものです。学術的調査研究でも学生教育でもないこの活動ですが、これを通じて大きく成長していく学生を見ることは教員にとって大きな喜びでもあります。

多忙な業務の合間に綿密な準備をしてインタビューの臨んでいただいたソーシャルワーカーの方々、煩雑なコーディネートをしていただいた宮城県社会福祉士会事務局の皆様のご支援に、誌面を借りて改めて感謝申し上げます。

被災地の復興までにはまだまだ長い時間が必要であり、支援を行うソーシャルワーカーの役割も時間ともに変化していくでしょう。本プロジェクトも復興の歩みに寄り添いながら、地道に継続していきたいと考えております。今後も皆様方のご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

も　く　じ

Ⅰ　事業の概要　・・・・・・・・・7

Ⅱ　「ソーシャルワーカーの”声”プロジェクト」　第3次派遣　・・・・・・・・・10

Ⅲ　報告集

座　学　**事前学習**
2013年1月9日～2月13日　関西福祉科学大学　寺　田　茉莉子　・・・・14

座　学　**事前オリエンテーション・事前研修**
2013年2月7日～3月1日　淑 徳 大 学　山口恭平・大藤未来　三島木大樹・大内育恵　・・・・15

座　学　**プレインタビュー**
2013年2月22日　関西福祉科学大学　植　田　美　悠　・・・・16

座　学　**オリエンテーション**
2013年3月3日　関西福祉科学大学　篠　原　拓　弥　・・・・18

講　義　**宮城県における被災者支援の現状**（サポートセンター事業を中心に考える）
2013年3月3日　中部学院大学　石　川　智　也　・・・・19

講　義　**宮城県における被災者支援の現状**
2013年3月3日　淑 徳 大 学　大　藤　未　来　・・・・23

講　義　**宮城県における被災者支援の現状**
2013年3月3日　関西福祉科学大学　篠　原　拓　弥　・・・・24

その他　**交流会**
2013年3月3日　関西福祉科学大学　黒　住　香　子　・・・・26

視　察　**名取市・東松島市～南三陸町**
2013年3月4日　関西福祉科学大学　泉　　綾　子　・・・・27

視　察　**名取市・東松島市～南三陸町**
2013年3月4日　淑 徳 大 学　大　内　育　恵　・・・・29

その他　**激甚被災地訪問ミーティング**
2013年3月4日　関西福祉科学大学　寺　田　茉莉子　・・・・31

ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ　**株式会社宮城登米広域介護サービス**
2013年3月5日　中部学院大学　原　　恵 理 菜　・・・・32

ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ　**登米市中田・石越地域包括支援センター**
2013年3月5日　関西福祉科学大学　植　田　美　悠　・・・・37

ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ　**Ⅰ区地域包括支援センター**
2013年3月5日　淑 徳 大 学　山　口　恭　平　・・・・39

その他　**ミーティング**
2013年3月5日　関西福祉科学大学　泉　　綾　子　・・・・41

ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ　**特別養護老人ホーム　せんだんの里**
2013 年 3 月 6 日　中部学院大学　古　田　陽　亮　・・・・43
ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ　**涌谷町居宅介護支援事業所**
2013 年 3 月 6 日　関西福祉科学大学　黒　住　香　子　・・・・46
ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ　**宮城県スキップケアプランセンター**
2013 年 3 月 6 日　淑 徳 大 学　三島木　大　樹　・・・・48
その他　**グループ討議**
2013 年 3 月 7 日　中部学院大学　古　川　友　子　・・・・50
その他　**グループ討議**
2013 年 3 月 7 日　淑 徳 大 学　大　内　育　恵　・・・・53
その他　**グループ討議**
2013 年 3 月 7 日　関西福祉科学大学　黒　住　香　子　・・・・55

Ⅳ　学生コメント
関西福祉科学大学　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
淑　徳　大　学　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
中 部 学 院 大 学　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60

Ⅰ　事業の概要

１．福祉系大学経営者協議会「東日本大震災復興支援プロジェクト」について

福祉系大学経営者協議会は、福祉系大学の経営に携わる責任者が一堂に会し、社会福祉専門職の社会的地位の向上、社会福祉についての社会的認知の向上、日本の社会を支える社会福祉人材育成教育の発展等を推進することを目的として、平成 21 年 6 月に設立され、全国の福祉教育を実施する 20 大学が加盟している。

福祉系大学経営者協議会においても、東日本大震災に対する取り組みを行うべく、東北福祉大学・淑徳大学・中部学院大学・龍谷大学・関西福祉科学大学（委員長校）で構成される「復興支援委員会」を立ち上げ、「復興支援に関して何ができるか」を協議することとした。

２．コンセプト（基本的な考え方）

①将来の社会福祉を担う「人材育成」という福祉系大学のミッション

②福祉系大学が持つ「社会福祉に関する専門知識」

③「全国各地の大学」が参加する全国的発信力

等、福祉系大学経営者協議会の設立理念、団体の特徴を生かしたプロジェクトとする。

⇩

災害支援における社会福祉専門職（ソーシャルワーカー）に焦点をあてたプロジェクト

３．テーマ・目的

ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト

（災害支援におけるソーシャルワーカーの活動を記録する）

ソーシャルワーカーが災害時に「何ができるのか」、「何をすべきなのか」などを、実際に災害支援活動に従事ソーシャルワーカーから学生が聴き取り、記録として残す。

⇩

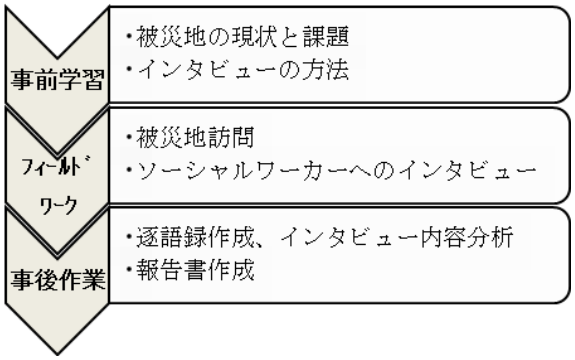
学生“語り部”プロジェクト

（ソーシャルワーカーの”声”を発信する）

ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」で聴き取った内容を整理し、講演や出版物などを通じて発信する。

４．プログラム

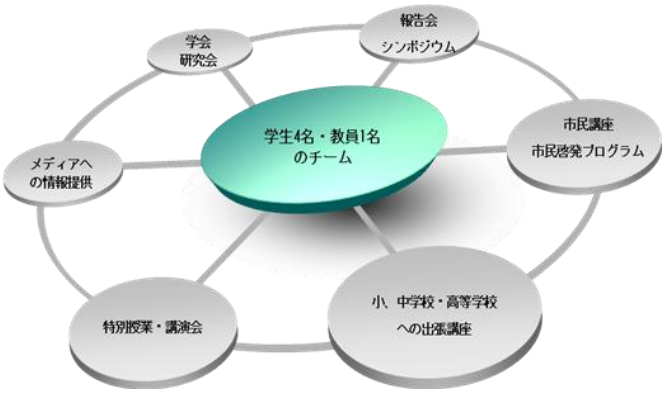
（１）ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト



・学内で一定のトレーニングを受けた学生４名と教員１名がチームを編成し、１週間程度被災地に入り、被災地の現状を理解すると共に、現地で活動するソーシャルワーカーにインタビューを行うなど、フィールドワークを実施する。

・フィールドワークの成果をまとめ、その内容をチームで分析し、インタビュー内容とともに報告書にまとめる。

（２）「学生“語り部”プロジェクト」



「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」に参加したチームが、学内外において広報活動を行う。

また、直接支援の実施を検討している機関、団体等に、要援護者および支援者であるソーシャルワーカーのニーズに関する情報を提供することで、支援とニーズのミスマッチを緩和する。

５．ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト　参加大学

①　：第１次派遣（パイロット事業）（宮城県　平成 24 年 3 月 12 日～17 日）
②　：第２次派遣　（岩手県　平成 24 年 8 月 21 日～25 日）
③　　〃　（宮城県　平成 24 年 9 月 3 日～7 日）
④　：第３次派遣　（宮城県　平成 25 年 3 月 3 日～7 日）

参加プロジェクト				大　学　名
１次	２次		３次	
	②		④	淑徳大学
	②		④	中部学院大学
①	②		④	関西福祉科学大学
①		③		文京学院大学
	②			日本社会事業大学
		③		日本福祉大学

６．本プロジェクトを起点とした展開

本プロジェクトはソーシャルワーカーの声を記録し、発信することを目的としているが、参加した学生や教員が中心となり、以下のような展開が考えられる。

①要保護者への直接支援

ソーシャルワーカーの視点から被災者の生活（生活再建）課題を明らかにし、「学生”語り部”プロジェクト」により広く地域社会に伝えることで、学生、教員など大学関係者をはじめ、外部の機関、団体による直接支援に結びつける。

②ソーシャルワーカーへの後方支援

「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」での聴き取り内容を分析し、災害支援活動における問題点や課題を整理し、ソーシャルワーカーへの後方支援策を模索する。

③次代のソーシャルワーカーの育成

ソーシャルワーカーとして災害支援を行う際に必要な知識や技術について理解し、講座やワークショップを通じて、大規模災害・事故等で機能するソーシャルワーカーを育成する。

Ⅱ　「ソーシャルワーカーの”声”プロジェクト」　第３次派遣

１．目　的

大規模災害時、ソーシャルワーカーが「何ができるのか」、「何をすべきなのか」などを、災害支援活動に従事したソーシャルワーカーから学生が聴き取り、ソーシャルワーカーの“想い”も含めて記録として残すことを主な目的とする。

２．概　要

学生４名（程度）と教員１名がチームを編成し、１週間程度被災地に入り、その現状を理解すると共に、現地で活動するソーシャルワーカーにインタビューを行うなど、フィールドワークを実施する。

また、フィールドワーク実施後、その成果を報告書・インタビュー記事にまとめる。

３．期　間

事前学習　　：　平成 25 年１月～2 月

フィールドワーク　：　平成 25 年３月３日（日）～3 月７日（木）

４．参加校（参加チーム）

関西福祉科学大学、淑徳大学、中部学院大学（各１チーム）

５．プログラム

（１）事前学習（各大学）

（２）フィールドワーク（宮城県）

①拠点（宿泊場所）

「東北自治総合研修センター」

宮城県黒川郡富谷町成田二丁目 22－1　TEL：022－351－5771

http://www.thk-jc.or.jp

②スケジュール

日　程		内　容	実施単位
３月３日（日）	14：00	現地集合（東北自治総合研修センター）	各チーム
	14：00～15：00	オリエンテーション：関西福祉科学大学　遠藤　洋二	合同
	16：00～18：00	講義：宮城県サポートセンター支援事務所長　鈴木　守幸氏 「宮城県社会福祉士会の取り組み」	合同
	18：00～20：00	夕食、休憩等	各チーム
	20：00～22：00	交流会	合同
３月４日（月）	～08：00	朝食等	各チーム
	08：00～18：00	激甚被災地訪問（名取市・東松島市～南三陸町）	合同
	18：00	東北自治総合研修センター　帰着	
	18：00～20：00	夕食、休憩等	各チーム

	20：00～22：00	ミーティング（グループ討議・インタビュー方法の確認）	合同
3月5日（火）	～08：00	朝食等	各チーム
	午前・午後	被害状況視察・インタビュー	
	18：00	東北自治総合研修センター　帰着	
	18：00～20：00	夕食、休憩等	
	20：00～22：00	ミーティング	合同
3月6日（水）	～08：00	朝食等	各チーム
	午前・午後	被害状況視察・インタビュー	
	18：00	東北自治総合研修センター　帰着	
	18：00～20：00	夕食、休憩等	
	20：00～22：00	ミーティング・反省会	合同
3月7日（木）	～09：00	朝食等	各チーム
	09：00～12：00	グループ討議・事後作業の確認	合同
	12：00	解散	

Ⅲ　報　告　集

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　寺田茉莉子
分類	座学
プログラム名	事前学習
日時・場所	2013 年 1 月 9 日～2 月 13 日　関西福祉科学大学

事前学習では、宮城県の白地図を用いて宮城県の地理について学ぶとともに、震災関連番組を視聴し、宮城県の被災状況について学んだ。また第１次派遣メンバーが、現地のソーシャルワーカー（以下ＳＷとする）に対して行ったインタビューの逐語録を読むことで、インタビューについての理解を深めた。

その他、事前学習で行った取り組みは複数あるが、ここでは事前学習を受ける中で特に刺激を受けた 2 つを挙げたい。1 つは、第 1 次派遣メンバーが行ったグループディスカッションである。テーマは、災害時でのＳＷの役割について議論された。災害直後、医療従事者や自衛隊の活躍はメディアによる報道で大きく取り上げられていた。ではその時「ＳＷは何をしていたのか？」と役割を問われた時、安否確認や相談援助などと簡単にまとめられてしまう。しかしＳＷの役割はそれほど単純なものではなかった。災害により支援が必要な対象者は増大し、さらに社会資源は崩壊した。そのときＳＷは平時でのネットワークや福祉に関する知識、技術をフルに活用し、対象者が生活できるような支援や社会資源の開発を行った。そのようにＳＷは対象者に寄り添い静かに命を守っていた。それがＳＷの専門性であり、役割であることを学ぶことができた。

2 つ目は神戸にある「人と防災未来センター」への見学である。阪神淡路大震災の被害や防災の大切さを学べるフロアが多くあった。特に印象に残っているのは、3 階の震災の記録フロアである。何百枚にも及ぶ写真や震災によって壊れた品などの資料がエピソードと共に展示されていた。同じ被災地でも同じエピソードのものはなく、1 つ 1 つの壊れた品には意味があった。また写真には災害の壮絶さと同時に、復興に向けて笑顔で奮闘している人たちが映っていた。そこから相互扶助の大切さや人間の力強さを感じた。そして私たちは、今後どのようにインタビューに臨めばいいのかと考える機会となった。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　山口恭平・大藤未来・三島木大樹・大内育恵
分類	座学
プログラム名	事前オリエンテーション・事前研修
日時・場所	2013 年 2 月 7 日～3 月 1 日　淑徳大学
講師	米村先生・長谷川室長・稲垣先生・松崎先生・伊藤先生

平成 25 年 2 月 7 日、14 日と 3 月 1 日に事前オリエンテーションが行われた。

2 月 7 日は、今回のソーシャルワーカーの“声”プロジェクトの目的について説明を受けたあと、稲垣先生から被災地のソーシャルワーカーの現状と災害支援についての講義を受けた。

今回のプロジェクトの目的は、『ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト』で得た情報を、教員指導の下、参加学生が分析し、「災害支援におけるソーシャルワーカーの機能、役割」、「ソーシャルワーカーへの後方支援策」、「要援護者の現状とニーズ」などについて、広く社会に発信するということであった。

まず、稲垣先生の講義では「現地のソーシャルワーカーも被災者であり、地域全体が傷つきネットワークもなくなっている。その中で、ソーシャルワーカーは支援を続けていかなくてはならない。また、コミュニティーワークの専門性として住民の特性にあった介入方法が必要である。」という話を聴いて、その地域や住民の特性について調べインタビューに臨む姿勢が大事だと思った。

次に、前回参加した学生が私たちに前回の報告とその経験、反省点を話してくれた。その詳細は、インタビューが長時間である為、インタビュー対象者の情報や、被災地の現状・住民について調べ、ある程度質問内容を考えた上でインタビューに臨む必要があるというものであった。その為に事前準備が重要であると感じ、しっかりと準備をした上でインタビューに臨もうと改めて感じた。

2 月 14 日は、米村先生からインタビューとはどういうものなのかという説明を受け、その後、松崎さんの職歴と現職務について話を聴き、質問項目を考え実際にインタビューを行った。そのインタビューをして感じ学んだことは、聞き手が聴きたい事と話し手が話したいことがかみ合わないことによる展開の難しさや、メモはポイントと流れを抑える方式で行ったほうがスムーズに書けること、またメモを取る人を含め全員がインタビュー対象者の目を見て話を聞くことでインタビューそのものが活気付くと学んだ。そして、この日の実践練習により、改めて半構造化面接が有効であると感じた。

3 月 1 日は、米村先生からプロジェクトの最終確認と、インタビュー対象者について説明があった。この日は、メンバーで質問内容の準備及びインタビューを行うまでの段取りの確認をした。また、各々のインタビュー対象者について調べて情報を集めてくることになった。プロジェクト予定が明らかになってきたことで、メンバー全員の意識が高まったように感じた。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　植田美悠
分類	座学
プログラム名	プレインタビュー
日時・場所	2013 年 2 月 22 日　神戸市立新長田勤労市民センター
インタビュー対象者	神戸市保護課　谷口重喜氏

宮城でのインタビューの事前学習として、神戸市保護課の谷口氏に阪神淡路大震災当時の状況や行った支援についてインタビューを実施させていただいた。谷口氏は 30 年間のキャリアをもつソーシャルワーカーである。

阪神淡路大震災が起こったときは、自宅で家族 4 人と寝ていたそうだ。20 秒以上の長い揺れで家財はすべて倒れ、照明器具もずれ落ちた。しかし職場が気になり、家の片づけは家族に任せ、町中ががれきや煙にたちこめる中、1 時間半バイクを走らせ、区役所に向かった。区役所では、約 30％の職員しか出勤できず、押し寄せる避難民の対応に追われていた。避難民は呆然としていて、会話にならない状態だった。最初の仕事は水道管が破裂していたため、濡れた書類を乾かすことであったそうだ。

誰もがこんな大震災を予想していなかったために、何も対策がなされていなかった。どんどん遺体が運ばれてくるにも関わらず、検死をする医者が足りていない、遺体を入れる棺桶・ドライアイスが足りていない、遺体を安置する場所がない、斎場がいっぱいで他都市に依頼しないといけない、たくさんの問題が挙げられた。また、棺桶の組み立てや 1 日に 3 回交換しないといけないドライアイスの交換に時間も人も必要であった。遺体の引き取りの際、兄弟の相続の問題でトラブルもあった。現在も 9 体の身元不明者がいるそうだ。

震災から 3 日間は職員が揃わなかったため、職員同士の協力や連絡相談が必要になった。しかし、情報のやりとりは、電話が使えなかったためにメモで行われていたそうだ。安否確認については、避難所においてメモを張りだし、また生活保護受給者や要介護高齢者の確認はそれぞれを担当するケースワーカーやホームヘルパーが行ったそうだ。

被災者への対応を行う職員は、行政職員でもあると同時に、ひとりの被災者でもあり、みんな心の中に葛藤を感じながらも、自分自身のプ

ライベートな問題は脇に置いて目の前の被災者への対応を行っていたことを谷口氏は教えてくださった。また被災者の前では公務員としての配慮が必要となり、被災者の前で食事などとることはできなかったそうだ。そして幸いなことに、そうした状況においても、神戸区役所の職員の中で精神的な疾患にかかる人はいなかったという。それは、ワーカーという仕事は人と接する仕事であってさまざまな人に対応する中で普段から訓練されていたのではないかと考える。

最後に谷口氏にソーシャルワーカーとして大切なことは、心にゆとりを持つこと、そして広い知識を持つことがゆとりにつながるということを教えていただいた。ソーシャルワーカーだからこそできる人との関わりが求められることをインタビューを通して学ぶことができた。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　篠原拓弥
分類	座学
プログラム名	オリエンテーション
日時・場所	2013 年 3 月 3 日　東北自治総合研修センター
講師	関西福祉科学大学　遠藤洋二氏

まず、江端学長から挨拶と、このプロジェクトの成功を願い、私たちへエールを送って頂いた。そして、遠藤先生からソーシャルワーカーの声プロジェクトについてのオリエンテーションが行われた。プロジェクトの概要、私たちは何をするのかを簡単に説明され、このプロジェクトの隠れたコンセプトは同世代の他大学の人たちと仲良くなること、楽しい雰囲気を作ることであると教えてくださった。

先生が一番こだわっていることは、このプロジェクトは教員がリードするものではなく学生の自主的・自立的なプロジェクトであるということである。したがって、何かしたいことがあればすぐに先生に相談に行き、積極的な参加が求められると思った。そして、自分の思ったこと、考えを他の人に伝えていけるように意識しておくことが必要だと思った。

ただ被災地を歩くのではなく、そこに何があったのかイメージしながら歩くことが大切だと教えていただいた。ソーシャルワーカーにとって現場をイメージする力は必ず必要になってくるので、しっかりと津波が来る前の状況、来た瞬間の状況をイメージしようと思った。

被災地訪問の際だけでなく、インタビュー時のアドバイスも頂いた。インタビューの相手は必ずしも被災地の第一線で活躍したソーシャルワーカーとは違う場合もあるということで、そこを意識しておかなければインタビューにずれが生じるということだった。また、インタビューは難しく、このプロジェクトではプロに学生が挑むものであるので、無理に質問しようとしたり、メモをとることに必死になるよりも、しっかりと傾聴し、その中で疑問に思ったことを自分の言葉でそのまま聞いていいとのことだった。何より学生ならではの感性や気づきが重要視されているように感じた。

先生方からのオリエンテーションに参加することで、プロジェクトを成功させチームとして協力し合い自分たちのミッションを果たしていこうというモチベーションを高めることができた。

作成者（大学名・氏名）	中部学院大学　石川智也
分類	講義
プログラム名	宮城県における被災者支援の現状（サポートセンター事業を中心に考える）
日時・場所	2013 年 3 月 3 日　東北自治総合研修センター
講師	宮城県サポートセンター支援事務所長　鈴木守幸氏

宮城県サポートセンター支援事務所長の鈴木守幸さんより、宮城県における被災者支援の現状についてサポートセンターの事業を中心に講義していただいた。その講義の内容を簡単にまとめたい。

サポートセンター

被害を受けた 13 の沿岸地域に 60 余のサポートセンターを設置した。弱い立場にある人達の支援を中心に活動を行なっている。運営主体は大半が市町村社協、他 NPO、民間会社等もある。サポートセンターで働く人のバックアップを目的として、県として宮城県サポートセンター支援事務所を設立。

基本的な枠組みとして「個別支援」「地域支援」がある。サポートセンターをこれからの地域福祉活動の視点として整理していく必要がある。被災者全体を対象とするわけでは無く、高齢者や障害者、パワーレスの方といった要援護者中心の支援を行なっていく。焦点を絞ってきちんとした枠組みの中で支援を展開していく。

サポートセンターでは、復興コーディネーターや生活相談員といった多様なスタッフが、日々の「見守り」を中心に行なっている。「見守り」は安否確認ではなく、在宅での生活に寄り添いながらニーズを掘り起こしてサービスに繋げていく、という最前線での活動である。孤独死を防ぐというよりは、生活課題にアセスメントができるような形で支援をしていく。そうすると自ずと孤立死は解決されていくだろう。

ソーシャルワーカーの敗北

2 年たった今、現在での長期化する仮設等避難生活や将来への不安が顕著化してきている。住民トラブル等色んな意味でギクシャクしてきている。被災者の中で共通している所もあるはずなのに分断されてしまっているところがあり、上手くいってないなと感じる。長期化するとより深刻化していく中で一生懸命やってくれていて、スタッフのアセスメント力がよくなってきてはいるが、生活課題の解決に向けたマネジメント・コーディネート力が不足している、育っていないと感じた。福祉の中核を担うべき人達がうまく機能していないのではないか。

震災でわかったことは、平時から地域に関わってきたのか、ソーシャルワーカーがどれだけ地域で役割をどれだけ果たしてきたのか、突きつけられた課題。今回の震災で教えられたことは、「ソーシャルワーカーの敗北」である。平時から地域の中で地域支援を積み重ねてきたのか、そう言った反省を突きつけられた。

みなし仮設被災者への支援

被災者に対しての仮設のイメージが強い。仮設住宅への支援が目に見えやすい。しかしみなし

仮設だと点在しているところにあるので支援が入りにくく、格差が出てしまう。やっとみなし仮設への対応がせまられてきた。それぞれサポートセンターで共通した支援の方向性にはなってきた。在宅の人にも捕捉できていけるように結びつけながら支援していこととしている。これから日々の活動としての支援として、市町村や社協などと総合相談会交流会を行なっていくことも、これから大切になってくるのではと思う。ある意味で、仮設住宅よりも孤立しやすい状況にある被災者への支援、本格的な支援活動をどう行うかが問われている。

一人のスーパーソーシャルワーカー小湊さん。震災災害時、ガソリンの確保を行い被災地沿岸部に支援に入った。ケアマネの安否確認を行いながら、要援護者の被災状況の確認、避難所での支援を連携しながら行なっていった。

平時からの活動

今回の震災で浮き彫りになったこととして、契約社会の中で、自己決定が不十分な高齢者・障害者やパワーレスの人たちが、申請主義の仕組みに対応しきれていない、アクセスすらできず、結果制度やサービスの恩恵に浴さない実態を嫌というほど突きつけられた。これは平時でも同じ立ち思った。平時から想定されていた社会状況（申請主義・縦割り行政）の中からこぼれてしまった。そういう人たちがいる事に、福祉でソーシャルワーカーがどれだけ思いを砕いてきたのかなと思うと、それができていなかったと思った。ソーシャルワーカーとして敗北したのだと突きつけられた思いである。

日頃から「弱者」とされてきた状況、被災でさらに「弱者」の構図が強まっている。

今回の震災で分かったことは、常日頃から住民に近い形で支援をして積み重ねてきた所は緊急時の対応もノウハウを持って対応できたのだが、意識していないところは何にも役に立たなかったことがはっきりしたことである。鈴木さん自身、地域での専門職のネットワークづくりをしてきたのだが、日常的に関わる人たちが支援をできる体制になってなかったら専門職に流れてこない。地域の中で活動や体制をどれだけ自分で支えてきたのか、そう人たちが繋いでこそ高齢者等の生活課題が掘り起こされて、ニーズに繋がる支援を行える。

地域福祉の基本

サポートセンターへの色々な支援（研修やフォロー、応援）をしていく中で分かったことは、サポートセンターをベースに行う被災者支援活動は、地域福祉の基本であるということだ。個別支援や地域支援の在り方について研修で伝えていくほど、平時から市町村社協は本当にやっていたのかと思った。市町村社協に、課せられた「地域福祉」を疎かにしたための「追試」と思ってやってもらいたい。個別支援が閉塞し、支援員が抱え込んでしまうような状況が目立つ。それをどうさせていくかが緊急の課題になっている。

生活全般の課題整備はソーシャルワーカーの真骨頂である。そうした所をほかの専門家とも連携をとっていかないと、被災者支援は難しいと思う。個別支援は、総合支援の体制を構築していくことで、一人ひとりのニーズに対応していく。多様な専門家の所へ派遣をして、連携体制を整えっていている。

終わりに

本来的な支援ができていないので生活不活発なリスクを抱える被災者が増えているのでは

ないかと心配であり、介護保険の申請が増えるのではなかと危惧している。いま仮設住宅に避難生活をしている被災者に、サポートセンターを中心にして本来的な支援を展開していくのがいいのではと思う。

過疎のところは淘汰されることが出てくるのではないかと思う。そういうところはしがみ付いているのは高齢者ばっかりだったりする。契約社会の中で申請主義にとらわれてしまってこぼれている人たちを忘れてしまうような形で、ワーカーが仕事をしているということからすると、本来的な在り方としておかしい。もう少し意識してこれから復興に向けていかなければならない。

色んな所で地域を再生しておこうという動きがある。しかし肝心の仕組みを動かしていく人材を応用していくことが見えていない。そういう人たちが役に立つようにするには、これまで十分に地域福祉の担い手として役割を果たしてこなかった社協が、地域福祉コーディネーター、コミュニティーソーシャルワーカーとして人材を養成していく必要がある。

ワーカーの敗北だと断定的に言ったが、頑張っている方もいる。一所懸命やっている姿を、皆さんも先輩方がどのようにやっているかを見て、まずは自分の目で確かめてほしい。

学生所感

・普段からのつながりや関わりが大切なんだなと感じることができた。

・ソーシャルワーカーも地震被災者であり、課題も多く残る中での活躍、地域密着を考えていかなくてはと思った。

・ネットワークの体制づくりを日ごろからどのようにしていくのか？

— 特別のことをすることでない。色々な社会資源をつなげて、多職種・チームで共有してつなげていくことが大切。ヒューマンネットが大切なんだ。

・スーパーソーシャルワーカーの行動はすごいなと思うところがあった。震災が起こったとき、自分はどういった行動をとるのかなと思い、ソーシャルワーカーの気持ちを考えさせられた。

— 綺麗ごとでなく丁寧さがないと難しい。きちんと寄り添いながら支援していくことが大切。

・ケアマネの震災時の行動はすごいと思った。自分自身の生活以上に、他人を思いやる気持ちは日ごろからの地域のつながりがあるからこそだと思った。

— 無理することはない。焦らずにできることからやればいい。いきなりスーパーソーシャルワーカーになろうと思わなくて良い。

・スーパーソーシャルワーカーと同じ気付きをできるようになるには今できることはあるのか？

— 講演の冊子などを読んだりしていると彼が日々考えていることがわかる。そうすればなれるのでは！？

・本とかテレビではわかりえない生の声、情報が聞けたことは貴重な経験になった。表面的なものとか自分の価値観で見るのではなく、その土地の生活習慣とか風土などを知ることが重要なことだと感じた。

— 自ら判断・申請できない、契約社会から零れ落ちるような人たちがいて、孤立死など問題も出てきた。そのことに対してどういう問題意識をどうだったと思っていたのか…。一生懸命やったつもりではあったが、やはり漏れていたなぁ、と今回の震災で突きつけられた。

・話の中で出た課題やワーカーの活動を次につなげていくために、伝えていくことが今回のプ

ロジェクトの役割でもあるのかなと感じた。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　大藤未来
分類	講義
プログラム名	宮城県における被災者支援の現状
日時・場所	2013 年 3 月 3 日　東北自治総合研修センター
講師	宮城県サポートセンター支援事務所長　鈴木守幸氏

宮城県サポートセンター支援事務所長の鈴木守幸さんから、サポートセンター事業を中心に、宮城県における被災者支援の現状についての話を聞かせていただいた。

まず、サポートセンターとは地域福祉活動の視点での被災者支援活動を目指し、宮城県内 13 市町に 60 余設置され、要援護者中心の支援を行っているものである。

震災後、契約社会のなかで、自己決定が不十分な高齢者・障がい者が申請主義の仕組みに対応しきれず、アクセスすらできず、結果、制度やサービスの恩恵に浴さない実態が鮮明になったという。もちろん、熱心に取り組んでいたソーシャルワーカーもいたが、高齢者・障がい者の地域生活を支える役割を担ってきた「つもり」でいるものとしての反省として、鈴木さんはこれを「ワーカーの敗北」と表していた。私は、この言葉がとても印象に残った。

また、被災者支援を行っていくなかで、サポートセンターのスタッフのアセスメント力は高まってきたが、被災者の生活課題解決にむけてのマネジメント・コーディネート力の不足が目立ってきたそうだ。そこでは、平時からソーシャルワーカーが地域で本来的な役割をどれだけ果たしてきたか、地域とどれだけか関わってきたかが問われたという。このことから、平時からの地域とのつながりや関わりが非常に大切なものだと分かった。

また、鈴木さんは「ここにいる、この人に頼めばこうしてくれると分かることがソーシャルワーカーの一番の財産だ。」とおっしゃっていた。これもまた、平時からのネットワークづくりが重要であるということだと思った。

私は被災地支援はとても特別なことだと思っていた。けれども、地域との関わりやネットワークづくりといった平時からの取り組みによってしっかりと作られた基盤があって、行えるものだと感じた。

震災があったからこそ、見えてきたものもあったという。鈴木さんは「これから同じことを繰り返さないためにも、何が問題だったのかを伝えていきたい。」とおっしゃっていた。このような、本やテレビではとり上げられない“生の声”を聴かせていただき、大変勉強になった。また、多くのことを感じ、考えることができた。

最後に、鈴木さんは「被災地、被災者が雪に埋もれてしまい、忘れ去られることのないよう、肝に銘じたい。」とおっしゃっていた。本プロジェクトに参加した私たちの役目は、ソーシャルワーカーの声を伝えることであり、同時に被災地や被災者を忘れてはいけないと伝えていくことでもあると改めて感じた。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　篠原拓弥
分類	講義
プログラム名	宮城県における被災者支援の現状
日時・場所	2013 年 3 月 3 日　東北自治総合研修センター
講師	宮城県サポートセンター支援事務所長　鈴木守幸氏

宮城県サポートセンター支援事務所長、鈴木守幸氏から「宮城県における被災者支援の現状(サポートセンター支援事業を中心に考える)」というテーマの講義を聞かせてもらった。

サポートセンターは、市町村に作られたサポート支援センターの後方支援のために設置された組織であり、13 市町に 60 余が設置されている。運営主体は、8～9 割は市町村社協であるが、他に社会福祉法人、NPO、民間会社等の場合もある。

サポートセンターによる被災者支援は、焦点がぼけてしまわないように、被災者全体ではなく高齢者・障がい者・児童のいる家庭など対象を具体化している。また被災者支援の基本は「個別支援」と「地域支援」を同時に行う必要があることから、地域福祉の視点に基づいた活動を行っている。

サポートセンターのスタッフは、復興支援コーディネーター、生活支援相談員、支援員等が各市町村により採用されている。そしてスタッフが行っている被災者への支援は「見守り」を中心に行われている。しかし彼らが行う「見守り」は生死の確認ではなく、日常生活に寄り添い、その人の生活課題をアセスメントすることで、孤独死を防いでいる。緊急雇用で採用されたスタッフは、有期雇用であることから、先の見えない不安の中で奮闘している。

サポートセンターの支援の現状として鈴木氏は、サポートセンターのスタッフのアセスメント力は高まってきたが、被災者の生活課題解決に向けてのマネジメント・コーディネート力不足に課題が残っていると言われた。また鈴木氏は、災害時に要援護者の地域生活を支える仕組みはできていたのか、機能したツールと機能しなかったツールを検証しなければならないとも言われていた。機能しなかったツールの例として、震災直後の混乱の中で、社会福祉協議会が行う日常生活自立支援事業が休止され、ボランティアセンターに置き換えられてしまったことを挙げられていた。日常生活自立支援事業が行われなくなると、それを活用して暮らしていた人々が生活できなくなるという問題を鈴木氏は強く訴えられていた。

今回の震災によって、契約社会の中で自己決定が不十分な高齢者・障がい者が、申請主義の仕組みに対応できず、結果的に制度やサービスを受けられない実態が鮮明になった。高齢者・障がい者の地域生活を支える役割を担ってきた「つもり」でいたソーシャルワーカーに、この災害は「敗北」を知らしめたと鈴木氏は何度も言われていた。しかし、地震が起きた直後、後のガソリン不足を予測して他県からガソリンを調達し、車での移動を可能にし、何人もの命を救ったソーシャルワーカーもいた。

ソーシャルワーカーには瞬時に何が必要なのか気づく力が大切であると思った。そして、その気づきを得るためにも、日頃から問題意識を持ち、地域支援をしていかなければいけないと思う。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　黒住香子
分類	その他
プログラム名	交流会
日時・場所	2013 年 3 月 3 日　東北自治総合研修センター

東北自治体総合研修センターに到着した日の夜、ソーシャルワーカーの声プロジェクト 3 次派遣メンバーとして集まった淑徳大学チーム、中部学院大学チーム、関西福祉科学大学チームの交流会を行った。

まず初めにお互いの自己紹介を行い、その後は自由に会話を楽しんだ。お互いの地元の話をしたり、趣味の話をしたりと話が絶えることはなかった。普段の生活の中で、異なる大学の学生とかかわることが少ないため、こうして他大学の学生と触れ合う機会をいただけたことは、大変大きな刺激となった。

またお互いの大学でのプロジェクトの活動内容やプロジェクトに入ったきっかけについても話し合った。このプロジェクトへの参加のきかけとしては、「先生に勧められて入った」という人もいれば、「何か自分にできることはないか」という思いから自主的に参加した人もおり、様々であった。しかしこうして交流を図ることができたことは、大学間の壁を超えて、3 次派遣メンバーとしてひとつのチームにまとまるきっかけになったのではないかと思う。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　泉綾子
分類	視察
プログラム名	激甚被災地訪問
日時・場所	2013 年 3 月 4 日　名取市・東松島市～南三陸町

プロジェクト 2 日目、被災地の視察を行った。私は第 1 次派遣のメンバーとして、昨年に被災地を訪れており、今回で 2 回目の視察となった。

東松島市大曲地区にはいくつかの壊れた家がぽつぽつとあるのみだった。新たに建設される家もなく、お供えの花も以前よりずいぶん少なかった。ここで暮らしている人々は、今どこでどんな気持ちで生活をされているんだろうと思った。ある学生はあたりを見渡して、「俺、逃げられへんわ。高台なんかないやん」と言った。住民の人もこのような気持ちだったのかもしれない。また他の学生は、「保存」と書いた紙が貼られた家を見て「何で保存なん？何か特別な思いや事情があるんやろうか。」とつぶやいた。

次に私たちは、石巻市にある大川小学校を訪れた。小学校の前には慰霊碑があった。私たちは、その慰霊碑を掃除していた 3 人の会話を聞き、胸がつまるような思いをした。「あたし、今日初めてここに来た。来ようと思わなかったけど、来てみると普通だね」と笑いながら話していた。この一言にどれだけの思いが詰まっているのだろうか。ここを訪れるまで、様々な思いがあったのだろうと考えると、何も言葉にできなかった。

遠藤先生から大川小学校は、遺族が市と学校を訴えている状況にあると聞いた。ぶつける当てのない状況だから被災者同士が責めあわなくてはいられないのかなと思う。私がもし小学校の先生や遺族なら、法律で決着がついたとしても、心がぽかんとしてしまう。お金や謝罪では埋められない無念さが必ず残ると思う。

次に南三陸町へ行くと、海辺にあったがれきの山がなくなり、コンクリートの山ができていた。志津川病院も見当たらず、玄関で手をあわせていた人の姿ももちろんなかった。南三陸さんさん商店街へ立ち寄ったあと、Yes 工房へ行った。ここでは町役場の方と地域の方が雇用の場、生きがいを作る場として、廃校になった小学校を利用し、手作りの商品を作っている。昨年、関西福祉科学大学では、Yes 工房の方に協力して頂き、学園祭での委託販売を行った。

工房の方から「南三陸、なんか変わりましたか。」と聞かれた。なぜ南三陸に毎日いるのに、このような質問をするのだろうと思いながら話を伺うと、「毎日風景を見ているとあまり変化に気づけないんですね。」と答えて下さった。震災の前も後も、全部つながっている毎日だからこそ、気づきにくいこともあるのかなと思った。

がれきや壊れた建物が片付けられ、町は綺麗になっている。しかし、街には工事の関係者がいるのみで、人の姿が見えない。片付けられていく街や誰も住むことができなくなった町を通って支援に向かうソーシャルワーカーのことを考えると、なんとも不思議な気持ちになった。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　大内育恵
分類	視察
プログラム名	激甚被災地訪問
日時・場所	2013 年 3 月 4 日　名取市・東松島市～南三陸町

午前 8 時過ぎごろ、私たち淑徳大学チームはレンタカーに乗り込み、まず始めに松島市に向かった。ここは観光地としても有名な場所で、ガイドブック等にもよく写真が掲載されている。私が震災以前に写真で見た松島はとても見晴らしがよく見事な風景で、一度は訪れてみたいと思う場所だった。震災後、その松島はどのように変化したのかとても気になっていたのだが、訪れてみると以前と変わらぬ素晴らしい景色が広がっていた。あの大震災が起こったということを感じさせない風景だった。松島がここまであまり被害を受けずに済んだのは、海岸から少し離れたところに小さな島があり、そこにまず津波がぶつかったことで沿岸に来る津波の威力が軽減されたためであった。松島から少し車を走らせた場所にあった老人福祉施設は、松島と海からの距離はあまり変わらないのにもかかわらず、島と島の間に位置していたために津波が直接押し寄せて来て、そこにいた利用者の方は皆亡くなられたそうだ。同じ地域でも少しの地形の違いでここまでも被害の大きさが異なるのだということに私は驚きを隠しきれず、その少しの違いが運命の分かれ道であったと痛感した。

その後私たちは行き先を変更し、石巻市の雄勝町に向かった。松島から雄勝町へ向かう途中、最初のうちは車窓から見える景色があまりにものどかで、被災地を訪れていることを忘れてしまいそうな程であった。しかし、車をさらに沿岸部の方へ走らせていくと、波打つように曲がったガードレール、天井や壁が剥がれ落ちた店や家屋が目に飛び込んで来るようになった。震災から二年が経とうとしていたが、駅の線路は途切れ、橋は崩れ落ちたままになっており、未だ津波の爪痕が生々しく残されたままであった。目の前にある風景は確かに津波の影響を受けているのだが、どのようにして津波が押し寄せてきたのか、私には想像し難かった。さらに車を走らせると、徐々に視界を遮るものが減っていき、私たちの目の前に現れたのは広大な更地であった。津波の影響を受けた

家屋や病院、学校が点在する中、空き地とも受け取れるその場所には震災以前は家々が建っており、そこは住宅地であったという。しかし、初めて訪れる私たちには以前の街並みを想像することは難しく、元々このような場所であったのではないかと疑ってしまう程、そこには以前の面影は残っていない。そこにあるのは僅かに残る家の土台のみで、視界を遮るものはほとんどなく、遠くの遠くまで見渡すことの出来てしまう光景を目の前に私は言葉を失った。同時にこの街をのみ込んだ自然の驚異を感じた。大切な家族が、大切に築き上げてきたものが、自然という力により一瞬にして奪われてしまったらどうやって気持ちを持てばいいだろう、どこに気持ちをぶつけたらいいだろう。改めて震災がもたらしたものは諮り知れないと感じた。

いずれは流されずに残った建物も取り壊されてしまうという。取り壊されるということは、今まで自分たちがそこで生活してきたという目に見える証がなくなり、全てが人々の記憶の中だけになるということだ。私は、“忘れてはいけない”と叫ばれている意味をこの時改めて噛み締めた。

所々で復興工事が行われていたが、あまりにも被害を受けた土地の範囲が広すぎるため、まだまだ復興工事が追いついていないという現実がそこにはあった。この場所に、再び人々の生活や笑顔が戻ってくるのはいつになるのだろうか。見渡す限りの広大な更地を目の前にし、私は“復興”という二文字の重みを感じた。同時に、復興には現地の方々だけでなく私たち一人ひとりの力が必要であると確信した。

復興支援のかたちは実に様々である。直接的に実際に現地に赴き、活動することだけが復興支援ではない。例えば、東北の産品を購入したり、東北へ旅行に行ったりすることも立派な支援だ。募金をしたり、寄付をしたり、私たちに出来ることは探せば数多くある。まずは自分に出来ることから始め、その輪が広がっていくよう、私はこれからも継続的に復興支援に携わっていこうと強く心に決めた。

地震大国である日本では、またいつ大きな災害が起きてしまうか分からない。その時に、少しでも被害を小さくすることが震災で亡くなられた方への追悼にもなるのではないかと考える。私たちは亡くなられた方のためにも、震災で学んだことを教訓にしていかなければならない。その教訓が災害時に自分の命を、または大切な人の命を守ることに繋がっていくのなら、亡くなられた方の想いを活かすことが出来るのではないかと考える。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　寺田茉莉子
分類	その他
プログラム名	激甚被災地訪問ミーティング
日時・場所	2013 年 3 月 4 日　東北自治総合研修センター

激甚被災地訪問後、東北自治総合研修センターの一室にて、「関西福祉科学大学」の学生 5 名、「淑徳大学」の学生 4 名、「中部学院大学」の 4 名でミーティングを行った。最初に、東日本大震災の当時の津波被害がわかる映像を全員で視聴した。その映像は、避難していた人が撮影したものであり、これまで築きあげてきた人々の生活が崩れ落ちていく様子が映し出されていた。昼間に被災地を訪問したが、震災から 2 年経っていたということもあり、どこかで傍観者のような感覚があったが、この映像を見ることで他人事には思えないという気持ちが増した。

ミーティングでは、各大学で被災地を訪問して感じたことを話し合い、その後に各大学の代表が発表し、全員で共有した。

現在の津波の被害を受けた被災地は「なにもない」と感じるほど、瓦礫もなく人もおらず、ここに人が本当に住んでいたのかが分からない状態になっていた。私たちは東松島市大曲地区に立ち寄り、更地のような土地を歩いた。よく見ると、割れた手作りの皿や子どもが遊ぶブロックなどの生活用品を多く目にした。その光景を見て、ここで人々が生活していたことを初めて実感した。

このような状況を見てきた学生は、個々で感じることは多いものの咀嚼ができず、言葉にはできないという意見もあった。その中、各大学の学生が口を揃えて言っていたのは、震災のこと、被災者の想いなどを風化させてはいけないということだった。しかし現状では、徐々に東日本大震災が遠い記憶になってきている。学生たちの中に 1 年前にも被災地を訪問した者がいた。その学生は 1 年前との違いとして「1 年前よりも瓦礫は少なくなり、道路ができていた。だけど線香や献花が少なくなった」と話した。震災から 2 年経ち、被災地に入るボランティア団体も減っていき、マスメディアでの取り上げも減っている。私たちのプロジェクトは、被災地で働くソーシャルワーカーの声を伝え、災害支援でのソーシャルワーカーの意義を見出すことがミッションである。しかし私たちのこの活動は、ソーシャルワーカーの声を伝えることで、聴いていただいた人々にとって東日本大震災のことを振りかえる機会になるのではないだろうか。

作成者（大学名・氏名）	中部学院大学　原恵理菜
分類	インタビュー
プログラム名	株式会社宮城登米広域介護サービス
日時・場所	2013 年 3 月 5 日　登米市迫町
インタビュー対象者	介護事業部長　鈴木俊彦氏

宮城登米広域介護サービスで介護事業部長として働いていらっしゃる鈴木俊彦さん（角田市出身）にお話しを伺った。鈴木さんは、福祉大学卒業後、角田市の特別養護老人ホームで生活相談員（事務）として 7 年間働いた。その後、運送屋さんに転職、約 1 年働いたのちに就労支援の施設で約 1 年働いた。そして、施設を退職後にアルバイトをしていた。この頃、介護保険が始まりケアマネジャーとして働き始める。今から 14 年程前に今の職場で働き始め、約 7 年前に社会福祉士を取得した。

震災直後の状況

鈴木さんは、地震が起きた時事業所内で会議中だった。当時、ケアマネジャー部門で働いていたため早急に自宅に居る担当利用者さんの安否確認に向かった。東日本大震災が起きる前、栗原で起きた地震を教訓に利用者さんのデータ（連絡先、近くに支援者が居るか、独居か、日中独居かなど）をパソコンだけでなくペーパーで持つことにしていた。このデータは毎月変更があれば更新してコピーし業務マニュアル（一部）として持っていた。このデータがあったからこそ、停電している中でも、職員が居なくても安否確認を開始することができた。1 日目は安否確認を一人で行っていたが、行ったら最後、電話が通じないためどこでなにをしているのかがわからなかった。そこで、2 日目以降は二人一組で行うこととなった。

震災当時、ほとんどの職員が外に出ていて個人個人の判断で心配な利用者さんのお宅を回りながら事業所に帰ってきていた。以前から地震が続いていたため、地域（自宅）で暮らす利用者さんには、災害時には私たちがくるから大丈夫ではなく、できるだけ隣近所と協力してもらえるように働きかけていた。その働きかけもあって、安否確認・避難誘導も隣近所や民生委員の協力があった。

電話がつながらないため、事業所に助けを求める電話もなく、訪問した時に話を聴き必要があれば避難・支援を行った。その後、電気やガソリンの問題もあり、家族に任せられる利用者さんはお願いして仕事を少しずつ詰めていく（減らす）ようにした。

震災前、事業所内の手順として震度 5 以下の場合 5 以上の場合というマニュアルが組まれていた。利用者に対しての手順は、条件が違うため安否確認として NTT の伝言ダイヤルを使用することになっていた。しかし、震災時は電話がつながらなかったため使うことができなかった。直接訪問して確かめるしか方法がなかった。

南三陸、気仙沼にも事業所があったため全ての安否確認ができたのは 3 日目の昼ぐらいだった。高台に避難して移動手段がないままに確認ができず、3 日目になってやっと知り合いの方に山沿いの道を車で送ってもらって確認に向かった。

停電は、約 10 日間続いた。

手順と組織の難しさ

電気が使えない中で、自宅でエアマットを使われている方は潰れてしまっている、電動ベッドの方は上がったままの状態だった。震災から 2～3 日目に二人で対応にあたった。その当時、福祉避難所の情報が県から降りてきていなかったため事業所自体がすべて動くしかなかった。社会福祉協議会で建物を、担当は誰で、と電話が通じない中で自ら行って交渉した。市役所で食糧を、工事業者（知り合い）に発電機を借りた。すべてがそろって最終打ち合わせをしていたら電気が復旧した。

また、対組織となると貸す貸さないといった問題もあった。何回も会議しなければいけない組織だと現場レベルでは可能でも、いざ会議にかけてみると貸してもらえないということもあった。個人で話したことも、協会としては話しがきていないという場面を迎えたこともあった。

事前に福祉避難所の存在を知っていたら利用していたが、当時はわからなかったため自分たちですべてやろうとした。その状況でも、やはり周りの理解が難しかった。しかし、いざという時には交渉すれば食糧や発電機も手に入るんだということがわかり参考になったと語る。

電気が復旧して

サービス事業所が立ち上がり始める。どこがいつ開始するかの情報共有は、ケアマネジャー個人だけでは全てに広がらないためペーパーや黒板に書いた。どこのデイがいつから開始、時間制限など聴いた人が書き、それを見て頼みたい人が頼めるようにした。地元では、以前からある「はっとＦＭ」というＦＭ局が放送を始めた。そこでもデイの開始などを流し、情報発信を行った。職員間での情報共有も黒板などを通して行った。

落ち着いた頃、気仙沼に入り地元の職員に聴いて衣類やハブラシなどをワゴン車に 2 回分ぐらい詰めて運んだ。南三陸では、職員の車を一緒に探しに行ったり避難所を回ったりした。登米は津波の影響がなく停電や水が少し出づらい、瓦が割れているという程度で、気仙沼・南三陸と比べれば不便はなかった。登米にずっといた人からすれば大変だったということになるが、気仙沼・南三陸と行ったり来たりしてみると手をかけなくてもいいくらいだったという。

また、気仙沼では事務所が 2 ヶ所あったところを上手く 1 ヶ所に統合していた。そこに職員が居たため基点となり、ボランティア団体やＤＭＡＴ（災害派遣医療チーム）など続々と入ってくる支援団体に連携も難しいままに収集がつかなくなっていた。この時から、ほぼ毎日、支援団体の方がまとまりの中で打ち合わせをしてした。気仙沼の職員はエコマップのようなものを作り、この案件はどこに連絡するかなどがわかるように交通整理のような形にした。

ボランティアの存在

ボランティアは、夜には帰られるし費用もかからないため“来て来て状態”になってしまう。しかし、いつまで続けてもらえるのか確認がとれない。それは、介護事業をしている側からすると、どれぐらいの支援のバランスをとってもらえるかがわからないため困る。ボランティアが多く入ると支援も大きくなる。その大きくなった支援を受け継ぐのは地元の事業所だ。その支援が大きくななればなるほど地元の事業所は抱えきれなくなってしまうのだ。いろんな手があって量があって支えられていたものが、いきなりなくなってしまったら行くほうの私たちがすべて抱えきれるわけではないので・・・と鈴木さんは語る。

ボランティアなどの支援団体の受け入れは、市役所（役場）の機能がどの程度残っているか

どうかによって左右されるのではないかと鈴木さんは語る。それは、気仙沼は市役所が流されずに残っていたのに対して、南三陸町は市役所が津波で流されたため住民のデータなど全てがなかったことからもわかる。気仙沼では被害を受けたところと受けていなかったところがあり支援の配分が難しかった。しかし、南三陸町はすべてがなくなってしまったために、打ち合わせする弊害もなく、すぐにボランティアセンターを立ち上げることができたのではないかと予測を立てる。

気仙沼への支援

4 月 2 日、小湊さん（角田市出身、鈴木さんと同じエリアで福祉の仕事をする）の呼びかけで気仙沼に福祉避難所を立ち上げることとなった。場所と寝るスペースを確保し、登米から社会福祉士・ケアマネ協会から支援が入った。地元の人からは連日来てほしいという希望があったが、入ってすぐは難しかったため週 3 回 2 名 1 組でスタートした。その時、東京からメッセージ、全老健（全国老人保健施設協会）、東京都介護ボランティアからスタッフが、食事は栄養士会の方が入った。4 月 16 日から 6 月 25 日まで社会福祉士 1 名、ケアマネジャー1 名と共に入った。

南三陸への支援

行った当初、津波直後から少し落ち着いたところで仮設の市役所もできていた。そこに相談に来る人もいたようだが、そこに行ける職員の体制がまだ整っていなかった。顔を合わせたことのある人もいたため登米と連携をとりつつ支援を行った。

当時、約 3～4 ヵ月の間水が使えない状態だったため、入浴のニーズがあった。訪問入浴は電気と水道が必要なため、発電機と水のタンクを積んで訪問入浴車と共に利用者の元へ向かった。

南三陸と気仙沼の間で担当上の問題があったため、そこにも 4 月 20 日すぎあたりから 30 件行くことになった（ボランティアではなく通常の業務として）。

タイムラインの時間差

急に連絡があって、急にどこかに行って、急に何かさせられるということに慣れておく。これは、普段からやっておくべきではないかと鈴木さんは語る。通常、ある会議をするために内容はこうで主旨はこうです、と 1 ヵ月前から連絡がきたりする。そうなると、ちゃんと準備をしてからいくため会議の中で違ったニュアンスのものがでたりすると混乱する。事前の情報がない、準備する時間もない中で動くということを普段からやっておくことで災害時にも活かせるのでないかと語る。

気仙沼での福祉避難所を行っていく際、事前に何回か会議を行い現在の現状なども共有した。いざ現地に行ってみると言われていた状況と違い利用者さんに問う。そして、スタッフが交代で行くため、また利用者さんに同じことを聴いて、ということが繰り返されてしまった。この一件から、もう来ないでくれと言われたこともあったという。そこで、前もって言ったり、やったことでもタイムラインの時間差が生まれることを知った。この間打ち合わせした時には、こういう支援をしてもらいたいということがあっても、実際 3 日後に行ったら変わるということだ。

橋渡し

南三陸は登米の隣町ではある。しかし、南三陸にとって登米はどこに何があるかがわからない状態だった。そこで、南三陸でまだケース持っていると思った時は、登米の最寄りのデイやショートステイをやっている事業所に連絡があったら協力してくださいと言って周り“橋渡し”をした。

登米の市民病院に南三陸の方が電話した際には、上手く話が通らない、情報を欲しいと言われるという話があった。その時には、南三陸町は津波の被害ですべて流されてしまって情報を出したくても出せないのだということ、受け入れる時に配慮をお願いしたいということを登米の病院に伝えた。

何ができるのか

南三陸に入って一番に思ったのが、ボランティアという形もあったとは思うが、いつまでできるかどうかわからない関わりをするよりは制度上として入ったほうが間違えないお手伝いができると鈴木さんは語る。現地が来てほしいと言ったら、もうそれだけに応える。10 人来てほしいと言ったら 10 人。というようにその現場の声を聴き動くことが大切である。

登米から南三陸に行くと通常の状態でないことは目で見てわかる。しかし、感覚はなかなかわからない。現地はもう 20 時くらいに電気消して寝ているのに、行った人が夜遅くまで起きている人で 22 時くらいまで動いていたとしたら手伝いに来たのか邪魔しにきたのかわからなくなってしまう。“現場の温度”を感じていくことが必要。

“つなぐ先を意識する”ことも大切である。例えば、役場の方に問題整理をしたものを渡すと溜まっていくだけで、そこから受けた人がやらなければいけなくなる。資格を持っていると自分の領域の中でやりたいところもでてくるが、そこを現場の温度と合わせていくことが大切だと語る。

仕組みがあっても担っている人がいなければ動いていかないため、どこにどうつなぐかの情報も大事である。

連携

地元の研修会にでたりして、“顔”を出していかないと始まらないのではないかと鈴木さんは語る。親しい方であれば電話で話していても誤解を生むことは少ないが、初めて会った人の場合は伝えたいことが伝わらないことがある。まずは行って話をすること、そこから始めて関係づくりをしていくことが必要である。音声や活字だけでは伝わらない、感情の部分、一生懸命さは顔と顔を合わせなければわからないことである。

ユニホーム

現地に入る際、社会福祉士と書いてある“ユニホーム”を着ていくと受け入れが早かったという。名刺代わりとなって、特に被災地では周りの認知が早くなるという。

自己完結形

石巻で行われていた、受けたら最後までやるという体制。一つのシートにまとめて、一日で

終わらなかった部分は次に人に引き継げるようにした。

ソーシャルワーカーだからこそできること

行った時にできることがあれば、まずはそれをやることも大切ではないかと語る。やはり、第一は医療でありスピードが早く同じタイミングで行くと逆にやることがない。タイミングでいえば二番手くらいになるのでなかいかと語る。さらに、一人ではなく複数でチームとなって行った方が現地の人の手間が少なくてすむ。つなぎ先の確保、社会資源、地域の実情を把握するメンバー、相談をうける窓口確保なども大切な仕事である。

そして、一歩引いて全体を見ていく力も大切だと語る。調整をしていくためには、一歩引いてどこがどう上手くいっていないかを見ていくことが必要である。また、手に入れた情報を他の人でも見ることができるように共有し、時間差を考慮しつつ動くことも大切である。

伝えたいこと

こんな地震来ないといいですよねということ。

まず、いくら資格を持っていても身の安全を確保してほしい。介護・福祉だといって最前線で自分の命を危険にさらすことはないのではないかと語る。

普段からできることは、自分で何かするというよりも頼めばやってくれる人を少しでも多く作っておくこと。一人で頑張りすぎると難しい部分もあるので、地域の人や同じ協会の人と顔見知りになっておくことが大切。

情報の共有、顔が見える関係づくり、まずやってみようとすることの大切さを学んだ。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　植田美悠
分類	インタビュー
プログラム名	登米市中田・石越地域包括支援センター
日時・場所	2013 年 3 月 5 日　登米市中田町
インタビュー対象者	登米市中田・石越地域包括支援センター　石井知香子氏・三浦勝氏

私たちは、登米市中田・石越地域包括支援センターの石井知香子氏、三浦勝氏にインタビューを行った。中田・石越地域は、宮城県内でも内陸部に位置しており、沿岸部に比べ、被害も比較的少なかった地域である。

震災当日、石井氏と三浦氏は一人暮らしの高齢者や担当している心配なケースの自宅を、分担し車で回り、安否確認を行った。電話などの通信手段が使えなかったので、とにかく直接出向き、顔を見て声掛けをするという作業をしたそうだ。今回の震災以前にも大きな地震があり、その経験から安否確認をしなければならないということにすぐに結びついたとおっしゃられていた。

次の日からは、行政（震災対策本部）と相談し、車のガソリンが少なくなっていたこともあり、保健師の方とソーシャルワーカーがペアで避難所と利用者宅を回り、安否確認を行った。その中でも、不安の声として挙がっていたのが服薬している薬を処方してもらえる機関がない、在宅酸素に必要な電気が復旧していない、透析患者の通院問題など健康に関するものであった。石井氏らは、町の対策本部などから情報収集をし、“機関が機能しているのか”“どこで薬がもらえるのか”など、一人ひとりに合った情報を伝えていったそうだ。また、避難所では認知症や障がいがある方が福祉サービスを受けることができず、昼夜逆転の症状が目立ちはじめていた。避難所において対応できない方は、福祉避難所につないだり、福祉サービスや他府県の施設につないだりしたそうだ。しかし、避難所での生活はデメリットだけではなく、住民同士のつながりができたり、家族同士の絆がより深まるなどメリットもあったそうだ。

その後、石井氏と三浦氏は社会福祉士会から派遣要請を受け、沿岸部の支援も行った。主にニーズ調査・アセスメント・マネジメント業務であった。しかし、馴染みのない地域での支援は、中途半端になってしまい、十分な対応ができなかったそうだ。また、沿岸部がまだ混乱した状況の中での対応であったため、応援として支援を行ったけれど、逆に現地の支援者に迷惑や負担をかけてしまったのではないかとおっしゃられていた。

支援とは、信頼関係を基盤として成り立つものであり、その場の対応だけでなく、普段から寄り添い、話を聴き、共感する人間的な積み重ねが必要となる。また組織同士の関係においても、絵図らだけでなく、“あの施設にはこういう人がいてこんな支援ができる”といった人と

人のつながりが組織間の連携につながっていく。そしてこうしたつながりを築いていくのは、簡単ではない。

今回のように石井氏と三浦氏が混乱した状況の中で、支援を行うことができたのも、普段からの利用者や他機関との関わりがあってのことであり、それがソーシャルワーカーとしての専門的な技術であることを教えていただいたように思う。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　山口恭平
分類	インタビュー
プログラム名	Ｉ区地域包括支援センター
日時・場所	2013 年 3 月 5 日　Ｉ区
インタビュー対象者	地域包括支援センター　Ｊ氏（社会福祉士）

インタビュー初日、淑徳大学チームはインタビューに対してのさまざまな不安もあり、施設到着まで質問項目の確認または、受け答えなどがスムーズにいくように念入りに確認をし、インタビューに臨んだ。インタビューは、学生２名がインタビューを行い、残りの２名がインタビュー内容のポイントをノートに記載した。また、許可を頂き録音も行った。

今回、このインタビューに御協力いただいたのは、Ｉ区の地域包括支援センターのＪさん。Ｊさんは当時、ある利用者の家に在宅訪問の最中でそのさなかに地震が起こった。Ｊさんは大きい揺れを感じた後、急いで利用者さんの家の中のストーブを消し、利用者さんと外の柱にしがみつきしばらくゆれが落ち着くまでいた。その後、他の独居の方々の安否確認も行うため、ひとまず職場に戻ることになった。しかし、震災の影響ゆえに、道路陥没・水道管破裂・ライフラインの停止等々のため、街中は交通渋滞だったがＪさんは無事職場に戻れ、そこから自転車等を使い独居高齢者宅に安否確認を行った。その際、民生委員や地域住民らによっても独居高齢社宅の安否確認が行われていたそうだ。

話のポイントをまとめると、震災が起きる前から震災時に備えた準備が行われていたため、地域住民は自助だけでなく共助も行えるよう日ごろから民生委員・職員の連携がとれていた。つまり、平時から地域住民と独居高齢者のつながり、または地域と職員のつながり（ネットワークの構築）が出来ていたため、ニーズが最小限に抑えられたということである。また、他にもＪさんは、災害時でも平時でもソーシャルワーカーだからこそ出来る支援として以下の３つをあげている。1 つ目は、相手の話を聴くということ（傾聴）である。2 つ目は、相手が今何を感じ、どんな状態なのかということ（状況背景の把握・ニーズの把握）である。3 つ目は、何でもやってあげるというのではなく、自立して生活していけるよう促すこと（エンパワメント）が大事であると述べていた。そこから、要援護者の現状やニーズを把握するには、傾聴の姿勢で話を聴くといったことが大事とされることがわかった。また、Ｊさんの話と今回のプロジェクトの目的である「災害支援におけるソーシャルワークの役割と機能」を関連付けさせて考えてみると、平時も災害時も支援の内容は多少異なるが今大学で学んでいる、ソーシャルワーカーに大切な基礎（傾聴・アセスメント・エンパワメントなど）は役に立ち、ネットワークの構築も日ごろから連携があるからこそ災害時に機能し、その役割

が発揮されるのではないかと私らは考えた。

最後に、将来ソーシャルワーカーとしてさまざまな現場で働こうとしている人たちに一言お願いすると、Ｊさんは、2 点ほど話して下さった。1 つ目は、どんな人でも人を好きになってくださいということ。2 つ目は、自分の心にゆとりをもって援助を行ってくださいということ。

今回のインタビューをさせて頂いて、もしもに備えた支援を行うだけでなく、平時の支援援助をしっかりこなすことの継続が大事であるということを学び、Ｊさんの話を声として伝えていく必要があると心から感じた。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　泉綾子
分類	その他
プログラム名	ミーティング
日時・場所	2013 年 3 月 5 日　東北自治総合研修センター

プロジェクト 3 日目、1 回目のインタビューを終えた私たちは宿舎に戻り、それぞれが聞き取ったインタビューの結果を共有するために、ミーティングを行った。

中部学院大学（鈴木俊彦氏　株式会社　宮城登米広域介護サービス　部長）

「震災発生直後に何かしようと支援に入っても、医師ではないので、物資を配るくらいしかできず、福祉は二番手でソーシャルワーカーとしてはその後の生活についての支援を心がけた」とする報告が行われた。これに対して、福祉が二番手であるとはどういうことか、学生の間で議論をした。ソーシャルワーカーは医師のように最前線に立つ存在ではないが、一歩引いたところから、どうしてうまくいってないのかなど、客観的に全体を見渡している。その意味で福祉は二番手ということだったのかなと、ある学生が述べていた。

淑徳大学（板橋純子氏　仙台市虹の丘地域包括支援センター）

法テラスを利用する人の中で、知的障害者や失語症の人などコミュニケーションをとることが苦手な人たちがおられ、その方々が適切に相談できるようにソーシャルワーカーがコミュニケーション支援を行っていたことが報告された。またインタビューを受けていただいたソーシャルワーカーから送られた「ネットワークを構築し、機関とのつながりをもつために人好きになってほしい。相談に応じ、様々な気づきを得るためにも自身がゆとりをもっていてほしい」というメッセージも報告してくれた。

関西福祉科学大学（石井氏　三浦氏　登米市中田・石越地域包括支援センター）

薬が手に入らず困っている人を医療機関につなぐ、避難所で対応のできない人を福祉避難所につなぐなどの役割をソーシャルワーカーが担っていたことを報告していた。また一方で、つないだ先の機関が機能していない場合や、沿岸部の後方支援に入ったとき、地域の情報が分からず、うまくつなぐことができなかったという課題も報告がされた。さらに後方支援時に、単発の派遣だったので、中途半端になってしまい、現地

の職員を困らせてしまったのではないかというもどかしさを現地に派遣されたソーシャルワーカーが感じていることを報告していた。

学生にとってソーシャルワーカーの姿はイメージしにくいが、このインタビューの報告を受けて、複数のソーシャルワーカーの活動を知ることができた。災害支援時のソーシャルワーカーの役割とは何なのかを、今後のインタビュー内容の整理や分析を通して、よりいっそう具体化していきたいと考える。

作成者（大学名・氏名）	中部学院大学　古田陽亮
分類	インタビュー
プログラム名	特別養護老人ホーム　せんだんの里
日時・場所	2013 年 3 月 6 日　仙台市青葉区
インタビュー対象者	相談員　篠原千佳氏

仙台市の青葉区にある特別養護老人ホーム・せんだんの里にて、相談員である篠原千佳さんに震災当時のお話を伺った。また、篠原さんとともに、篠原さんの先輩にあたる副施設長の千脇さんにもお話も一緒に聞くことができ、このお二方のお話をまとめていく。

篠原さんは震災が起きた時、体調が悪く自宅で療養されていた。揺れを感じた時は立っていられない状況だったという。仙台市は内陸部にあるため津波の心配はなかったのだが、建物の倒壊などの心配があった。地震直後は電気、エレベーターなどライフラインのすべてがストップした状態となった。せんだんの里はショートステイ、グループホーム、デイサービスの利用者など約 300 人近くもの利用者が入居、利用されている環境である。そのため、施設内にいた職員らはまず、建物の外へ利用者に出てもらい人数、建物内の状況の確認を行った。厨房などからの火災は発生していないのか、建物の中に残ってよいのか、避難すべきかなどの確認を急いだ。その結果、火災の心配はなかったものの、建物の被害（約 1,400 万円の修理費用だったという）があった。周囲に比べるとそこまで大きな被害ではなかったそうだ。震災が起きた時間帯は、デイサービスの利用者を送迎する時だった。しかし、電話も使用できない状況であったため、職員が家に出向き、利用者が帰れる状況なのかどうかの確認へと向かった。その他にも、せんだんの里を避難所として来られる方のために入口の整備、食堂など利用できそうなスペースを開放した。当時は雪が降っていたため、寒さ対策として認知症センターから布団、懐中電灯を借りた。泊まり込みでの施設対応となるために職員の安否確認、日勤と遅番の交代制で職員の勤務を組んだ。個室もあったのだが寒さが影響して利用者の方々には広いフロアにいていただくことにした。非常食の確認を行ったところ 3 日分の量があり、1 日 2 食のメニューづくりをしたり、いろんな施設へ行ったりし、食料の交換などもした。カセットコンロを使い、簡単なうどんを提供。お皿にラップをするなどして衛生面にも気をつかった。経管者に対する食事に関しては、工場が津波の被害にあってしまったため白湯で対応した。低体温の方には簡易的な湯たんぽを使用し、元々お風呂にあった水をトイレ用に変えるなど、支援が来るまではこうした対応を行った。その中での唯一の情報源としてラジオ、自家発電機で利用者のところへ電気を通していた。当日の利用者さんの様子として、利用者は滞りなく生活ができていたようだ。他にも、インフルエンザの方が何名かいたのだが震災が起こってから治癒したそうで職員の方々も驚かれた様子だった。施設外で被害にあわれた方には、緊急の状況が続いていたためどんな状態の方なのかを把握する前に受け入れを行っていた。電気は 3 月 14 日、水道は 3 月 18 日、都市バスが 4 月 14 日に回復、復旧したそうだ。

施設内での対応が進むなか、篠原さんは沿岸部から仙台市へ避難してきた方のなかでも高齢の方、避難所での生活が難しいような方を施設で受け入れの対応もされた。近くの非常災害時でも繋がる公衆電話から仙台市とやりとりから福祉避難所にいる方に対して緊急的なデイサ

ービスとしてせんだんの里への受け入れを行っていった。その時も細かい情報は度外視したそうだ。なかにはある利用者の担当だったケアマネジャーの方からその方の情報をもらうようなこともあった。生命の維持・安心した生活環境を保つことが第一だったのだが、この方法に関しては反省点でもあると述べられていた。適切な支援をしてこそソーシャルワークであり、緊急時でも予め情報が分かるように紙などに書けるようなシートなどを作っておく必要があるだろう。介護士や看護師の不安解消にも繋がるのだとおっしゃった。その後で情報集めをしながら、仮設住宅に移るのか、自宅に戻るのかを判断していった。篠原さん他 2 名の方で相談対応をされた。

生存確認に関して当時、福祉避難所からショートステイの依頼が多かったため、デイサービスの職員もショートのほうで支援をする必要があり、そのため並行し支援をするのは難しく、デイサービスの利用者に対して施設の担当ケアマネジャーが自宅に訪問し、本人やご家族の方とお話をするなどして定期的な確認を行い、結果的にデイサービスは休業した形だった。デイサービスを利用される方の中で「この方は一人暮らしだから早めに確認へ行こう」など生存確認の優先順位を決めたという。訪問をする時には水やパンの提供も行って支援にあたった。特に一人で暮らす方は、タンスが倒れたままでも自分ではどうにもできなかったり、余震が続いていたりしたため確認を急ぐ必要があった。顔を見合わせることでお互いに安心感を得ることができたそうだ。

デイサービスが再開できたのは震災から 3 週間後。普段なら受けられているサービスが受けられないことへのご家族の不満やストレスを考えると早急な対応が望まれたのだが、初めは震災前と同じような支援はできず、簡易的な食事などからだった。この時期にはライフラインも再開していたためご家族の方たちと連絡を取り合ってニーズを確認し、支援を進めていった。やはり介護サービスのため介護保険などの制度も絡み、情報提供などスムーズにはいかなかった。

震災から 1 か月近く経って、お風呂など平時のサービス提供が出来るようになったのだが、震災から短期間でショートステイを利用されている方に関しては、長く支援が続いた。沿岸部の施設で受け入れの定員を超えてしまった時の対応も行った。他にも津波の影響で家をなくされた方の施設入居の受け入れ準備など新たに動くこともあった。法人内のみで対応する施設もみられ、沿岸部と内陸部での被害の違いから大きな被害にあわれた方に対して何も言えず、ストレスを感じる職員もいたりとそれが利用者にまで影響するようなこともあったようだ。「沿岸部の被害に比べれば」という思いから気持ちを一人で抱えてしまう方もいたそうだ。そうした感情を調整していくことも必要だった。なかなか気持ちを外に表出することが難しく時間のかかるものだった。篠原さんは実際に大きな被害を目の当たりにすると何とも言えない無力感を感じたそうだ。

篠原さんはせんだんの里から離れた地域へボランティアとして支援にあたられた。しかし、支援にあたろうとしても、その地域まで向かう方法や、特性を知らないには適当な支援はできないため簡単にはいかなかった。地域包括支援センターの社会福祉士の方のお手伝いとして地域包括で関わっている避難所生活の方々にお話を聞くことや、ライフラインの復旧調査などの総合相談支援にあたった。篠原さんには会話をされるなかで少しでも不安に感じることは言ってもらいたいという思いはあるものの、支援にあたっている自分たちに気遣ってくれるような姿を見ると反対に勇気づけられたという。知らない地域での支援のため、地元の方とのコミュ

ニケーションはスムーズにいかなかったようだが、被害の違いから支援物資を同じように貰えない、貰いづらいといった方もみえ、そういった方は他地域から来た篠原さんに話しやすかったようで、近隣の人には言えないような悩みを聞くことができたそうだ。日常的に接している人には話せない内容だからこそ篠原さんには話すことができたのだろう。
それ以降は浸水している地域の方に対しての前後調査、福祉的な相談、法律、制度的な相談、環境調整法テラスでの活動もおこなった。法テラスでは、法に関した専門家へ無料で相談する場であり、ソーシャルワーカーとして参加された千脇さんの受ける相談内容のほとんどは情報を整理するものだった。例えば、弁護士といった専門家へ相談しようにも本人自身何を伝えるべきなのか整理できない場合があるため、かわってワーカーがその主訴を見極めていく。どうしても法律や制度のみに着目してしまいがちになってしまう。そこへワーカーが介入することにより、相談者の思いをくみ取ることができるのだ。離婚問題や土地問題、財産に関する相談など、月日が経つごとに相談内容というものは変わっていったそうだ。

緊急時においてソーシャルワーカーとしての専門性は発揮できるのだろうか、役割はあるのだろうか。それははっきりと言えるものではなく、目に見えないものばかりで伝わりづらいものだ。篠原さんらは、震災を通してソーシャルワーカーの幅の広さを感じたという。利用者を取り巻く地域、環境を把握し、社会資源と照らし合わせ適切な支援を行う。漠然と問題を抱えている人の気持ちや課題を整理し、長く、利用者または関係機関と関わりを保っていくことがソーシャルワークのひとつの専門性であり、相談者の感情にぶつかっていくことはソーシャルワーカーくらいがすることでそうした思いを整理、代弁、そして支援に依存しないよう見極めることが役割なのだろうとはなされた。そうした働きを平時から行っていくことにより、震災のような大規模災害が起こった時でも、ソーシャルワーカーが求められるのではないか。人の気持ち、感情にすら触れていくソーシャルワークはとても人間味のあるもので、震災などいかなる場合であれ、そんな力を必要とする声は必ず存在すると私は思う。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　黒住香子
分類	インタビュー
プログラム名	涌谷町居宅介護支援事業所
日時・場所	2013 年 3 月 6 日　宮城県遠田郡涌谷町
インタビュー対象者	涌谷町町民医療福祉センター　佐々木美由紀氏

遠田郡涌谷町にある涌谷町居宅介護支援事業所の社会福祉士である佐々木美由紀氏に震災当時の状況についてお話を伺った。災害直後、佐々木氏は居宅介護支援事業所の福祉課にて待機していた。大きな揺れが長く続く中で、「これはただ事ではない」と感じたと話された。揺れが治まった後、事前に作成していた「緊急時に訪問する利用者一覧」を頼りに、対象の方々の自宅を訪問した。

安否確認については、宮城県のケアマネジャーの多くが、「いつか大きな地震がくるのではないか」という思いがあり、安否確認についての話し合いがある程度できていたようである。例えば、在宅酸素の方であれば、緊急時に安全の確保をどのようにとればよいのか、緊急時酸素ボンベはどのくらいもつのかなどについて主治医とも連携を図って確認をとっていたそうだ。また一人暮らしの方に対しては、ヘルパーや民生委員が、安否の確認に行ってくれるという約束がある程度出来ていたそうである。そして震災当日において民生委員の方々は、すぐに自分たちの地域に出て、安否確認を行ってくださったそうである。

こうした佐々木氏のお話を伺って、やはり緊急時に備えた事前準備は非常に重要であると改めて実感した。またこうした事前の準備においては、普段からの他職種等とのつながりが重要な意味をもち、災害時にも大きな役割を果たすと感じた。

震災から数日たったころ、何度も続く余震でどんどん崩れそうになっている家があるという情報が民生委員などから、徐々に行政へ寄せられるようになってきたそうだ。そして佐々木氏は、こうした情報を受け、福祉課の職員の方と崩れそうな家の中におられる方の所へいって、安全な施設や病院に移る支援を行ったそうだ。

その後、佐々木氏は社会福祉士会からの要請を受けて、被害の甚大であった沿岸部に派遣というかたちで出向いたそうだ。

この派遣は沿岸部において、単に人手が足りないために行われたのではない。同じ専門職である社会福祉士が応援に駆けつけることにより、地元の支援者の応援となり、励みになっていくことも期待されていたそうだ。派遣先において、佐々木氏は自分自身のとった行動が「これまで地元の支援者が築き上げてきた住民の方々との信頼関係を壊すことにならないか」と考えながら支援を行ったそうである。ソーシャルワークの援助は、信頼関係が形成されたうえで成

り立つものであり、単に支援が必要とされる場所に行って支援を行えばよいというものではない。

佐々木氏のインタビューを通して、支援者を支えるための後方支援の必要性とともに、慣れない土地で後方支援にあたる者の慎重さや配慮の重要性についても学ぶことができた。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　三島木大樹
分類	インタビュー
プログラム名	宮城県スキップケアプランセンター
日時・場所	2013 年 3 月 6 日　O市
インタビュー対象者	ケアマネージャーA氏（社会福祉士）

3 月 6 日、淑徳大学プロジェクトチームは二度目のインタビューに臨んだ。この日のインタビューも一度目のインタビュー同様、チームの 4 名の内 2 名がインタビューを行い、残りの 2 名が記録する形式をとることとなった。しかし、今回は前回の反省点、改善点について対策をたてることができたので、前回とまったく同じではなく記録担当の 2 名も積極的にインタビューに加わることになった。そうすることで、よりインタビューの展開の幅を広げていく狙いがあった。また、あらかじめインタビューで聞く内容を前回よりも多く考えておくなど、入念に準備をしたうえでインタビューを行った。

インタビューにご協力してくださったのは、宮城県スキップケアプランセンターのケアマネージャー（社会福祉士）であるＡさん。Ａさんに、震災当時の気持ちや状況、気づきや今後していきたい支援、課題などについて語っていただいた。

震災時Ａさんは車で仙台市にいらっしゃったそうで、ラジオですぐに地震に気づいたそうだ。地割れや渋滞、ガスの匂いなどの周囲の状況に恐怖し、また一方で利用者の安全がとても心配だったという。そんなとき仲間から自分の担当している利用者さんの安全を確認したと連絡がきたらしい。また、東日本大震災で被災し、ライフラインなどあらゆる機能が停止、低下していた中でＡさんがここだけは良かったと思ったことは、事前の準備として地域の人とつながっていたことだそうだ。というのはＡさんの担当していた利用者さんに認知症の方がいて、その方には震災直後の記憶がなかったので、その後地域の方が異変に気づいたらすぐにＡさんに連絡をくれるという約束になっていたらしい。このように地域の人とのつながりによってさらに援助の幅が広がっていくのだろう。これらのことからこのような震災では個人では無力でも集団で協力することでできることが増えていく、支えあうことが大切であるということを学んだ。

Ａさんはこれからしていきたい支援として沿岸部から誘いがあれば支援していきたいとおっしゃっていた。現在、津波被害地以外はおおよそ復興しているが、まだ復興できていない地域も存在し、それらの地域のためにもできることをしていきたいというＡさんの思いが伝わってきた。また、専門職にラインを引かず、仕事で広い視野をもてるマルチなソーシャルワーカ

ーになり、事前の準備から人それぞれのものさしにあわせて支援し、対象者の心をできるだけ満足させていきたいと語っていた。

Ａさんが考えるこれからの課題は、専門職同士、また行政との連携だという。訪問で聞いていることがワーカー同士でかぶっていたり、行政が情報を集約したが連携がとれず情報が伝達しなかったからだそうだ。しかし、連携は被災地だけでなく他の地域においても必要であることだろう。その連携の基礎やネットワークづくりとして大学の仲間や他大学の学生などとのコミュニケーションを今からとっていくことが私たちソーシャルワーカーの卵がいつか実践するとき大きな財産になるだろう。また、それだけでなく私たち学生にも何かできることがあるのではないかとＡさんの話を聞いて考えさせられた。そのため、学生である自分にできることを積極的に行っていきたいと私は考える。

最後にソーシャルワーカーを目指す学生に伝えたいことについて質問したところ、相手の心を満たせるソーシャルワーカーを目指してほしい、そしてそのようなソーシャルワーカーに必要なものは「コミュニケーション能力」と「いろんな分野のわかる広い視野」であるとＡさんは語っていた。これについてのＡさんの想いは、学生たちに「人と話をする」ことで、これらの能力を身に着けてほしいとのことだった。加えて私は、多様な分野を理解し、その知識を活用できるよう日々の勉強に励むことも大切だと考える。

今回のインタビューでＡさんという一人のソーシャルワーカーが発信してくださった、被災時に何を感じ、今はどのように思っているのかなどの声を私たちはしっかりと受信し、その声を伝えていきたい。

作成者（大学名・氏名）	中部学院大学　古川友子
分類	その他
プログラム名	グループ討議
日時・場所	2013 年 3 月 7 日　東北自治総合研修センター

最終日、参加者全員でグループ討議を行った。このプロジェクトの目的である、“大規模災害時のソーシャルワークの役割・機能とは何なのか？”ということを頭に置きながら、5 日間のフィールドワークで感じたこと、気付いたこと、考えたことを議論した。大学も教職員も関係なく、3 つのグループに分かれて話し合った後、全体の場で意見を共有した。

＜1 グループ＞

- 大規模災害時にソーシャルワーカーとしてできることは、普段から行っている調整や連絡ではないか。例えば、家はなくなったけれど怪我はしていないという人は、医療のニーズはないが福祉的なニーズを求めている。必要な人や場所につなぐことができるのは社会福祉士の役割ではないか。
- 災害時ではないが、平時から人とのつながりをしっかり構築しておくこと。機関同士のつながりだけではなく、どこにどんな人がいてどんなことを頼めるのか、ちゃんと分かっておく。地域の住民同士のつながりもしっかり構築しておく。これがソーシャルワーカーの大切な役割。
- 災害時を想定して、誰が支援や安否確認に行くのか決めておいたから、支援が行き届いたという町の話を聞いた。平時から災害を意識することの重要さを感じた。
- 法テラスでは、弁護士などの専門家とクライエントの間に、ソーシャルワーカーが入って調整していた。アドボカシー、代弁機能も大切な役割。
- 医療チームは対象者がわかりやすいが、福祉チームは対象者がわかりにくい。生活面を支えていくのがソーシャルワーカーの役割だと思う。命が助かっても心が死んでいるような状態だったら、本当に生きているといえるのか？と思う。そんな人の心を救っていくのもソーシャルワーカーの役割になるのではないかと思った。

＜2 グループ＞

- ソーシャルワーカーだからできたことは“つなぐ”ということ。元々のネットワークがあるからつなぐことができる。傾聴やアセスメントの力がないと、うまくつなぐことはできないため、話を聴いてその人が何を望んでいるのか理解することが、ソーシャルワーカーだからこそできる役割。
- 平時から障がい者や高齢者と関わっているからこそ、災害時に安否確認の優先順位をつけて判断できる。これは福祉の一番手として駆け付けることができると言えるのではないか。
- 日常から関わっているからこそ、強がっている部分や無理している部分を感じとることができる。信頼関係があれば相談もしやすく、代弁機能として機関につなげたり潜在ニーズを掘り出し伝えたりすることができるのは、他の職種にはない社会福祉士の役割だと思った。
- 自分がもっていないものであっても、もっている人を知っていれば、そこへつなぐことが

できる。そのようなつながり、いろんなネットワークをもっているソーシャルワーカーだからこそ、フォーマルな部分からインフォーマルな部分まで、平時でも災害時でもどこにいても関係なく、何でも屋のように動ける役割だと思った。

- 津波被害が少ない地域のワーカーさんは、「私たちは“被災者”とはおこがましくて言えない」と仰っていた。他の人も遠慮して言えない部分があると思う。そのようなニーズをつかみとり、つなげていくことは、ソーシャルワーカーだからできるのだと思った。

＜3 グループ＞

- 法テラスで弁護士につなぐ前に、問題を整理し調整することができる。見えている部分だけでなく、隠れた部分にも目を向けられるという、相談援助の専門性を感じた。
- 日常生活がいかに保たれているか確認できるのは、対象者を気遣い、目を向けることができるソーシャルワーカーの専門性だと思った。
- ソーシャルワーカーとは、住民自ら解決していけるような支援をすることで、幸福な生活に結びつけるという役割をもっている。
- 福祉の対象は“心”。性格・話し方のリズム・抑揚などからアセスメントを行い、人それぞれのものさしに合わせたコミュニケーションをとることで、対象者の心をどれだけ満足させることができるか求められる。心の支援を果すことが、ソーシャルワーカーの役割だと思った。
- ソーシャルワーカーは、見えるところだけでなく見えないところも支援しようとする唯一の専門職だと思った。人が気持ちよく暮らすことができ、安心して悩み苦しみ、自ら向き合い解決していけるための環境を準備していくことが、絶対的なソーシャルワーカーの力だと思った。

＜教職員＞

- 潜在化したニーズという言葉がでてきたが、そこに着目すべきということは大学の講義の中で勉強しているはず。学んでいる援助技術と、今回聴いた話が結びつくことで、よりソーシャルワーカーの機能と役割が見えてくるのではないかと思った。
- 被害の差によって、助けを求める声を上げづらい状況が発生している。第三者の立場であるソーシャルワーカーだからこそ、ニーズを受け取り、それを発信していくことができる。アドボカシーの機能が大事だと感じた。
- フォーマルな支援が崩れてしまうため、普段から意識している“つながり”からいろんなところへ結び付けていけることが、災害時のソーシャルワーカーとしてできることだと思った。
- 災害後には“被害自慢”が始まる。これにより、被害を受けた人と受けてない人との間に壁ができてしまい、被災地を孤立させてしまう。だからこそ、被災地に行く意味がある。
- 2 ヶ月くらい避難所で生活を共にした時、医師や看護師は制服などで身分が分かりやすく、すっと入っていけるが、ソーシャルワーカーの方は普段の格好のため、分かりにくい。だがその分、静かに寄り添ってお話を聴いてらっしゃる姿が印象的だった。
- 激しく人の命を守ることができる人たちと、ソーシャルワーカーとは、アプローチ方法や役割が違う。遠藤先生がおっしゃった、「静かに人の命を守ることができる」これがソー

シャルワーカーの大きな役割なのだと思った。

- 一緒にインタビューに行き、発表を聞き、みなさんが本当によく聴いてこられたなと実感した。ソーシャルワーカーの方は非常に奥ゆかしく「たいしたことは…。」と、はっきり言ってはくれない。ワーカーさんの働きが見えてきたのは、みなさんがよく聴き理解をしたからだと思った。そういう力を持っているのだから、普段から人の話に心傾けて聞けていたのかどうか、改めて考えてもらいたいと思った。
- 医師・看護師・自衛隊が積極的に助けた命を、ソーシャルワーカーが引き継いで生活の基盤に乗せることで、静かに命を守ってきた。これがまさに“連携”だと思った。
- このプロジェクトが始まるとき、「学生に何ができるんだ」という批判もあった。ソーシャルワーカーの機能や役割を学生が聴き取ることなどできるのかと。だが、みなさんはよく聴き、感じ、言語化しており、その批判には十二分に応えていると思った。福祉の勉強は授業を聞くだけではない。さまざまな経験を通し、ソーシャルワーカーとしての役割を一歩ずつ身につけて行ってほしいと思う。
- がれきも片付き、悲惨な状況を直接目にすることはできない今、被災地に来る意味はあるのか、何がわかるのだという話もある。だが、その現場にいないというのは普段のソーシャルワーク場面でも起こること。その場面を想像する力・寄り添う姿勢・傾聴する技術が必要になる。空き地のようになってしまった現場に来て、どのような暮らしがあったのか？どんなに辛い思いをしたのか？…と想像して、感じる必要がある。だから、被災地に来る意味があるのだ。

この５日間で感じたこと、気付いたこと、考えたことを共有することで、災害時のソーシャルワーカーの機能・役割とはなにか、さまざまな視点から見ることができた。また、震災直後からこの２年間､ソーシャルワーカーの方々がどのような気持ちで支援活動をされてきたのか、それぞれが感じたことを確認し、深めることができた。そして自分に置き換えて考えるということの大切を学んだ。もし自分が地震にあったらどんな気持ちだろう？ソーシャルワーカーとして、どのように活動するだろう？…と想像してみることで、初めて被災者のみなさんの気持ちに寄り添うことができ、支援活動へつなげていけるのだと感じた。

このプロジェクトは、ここから始まる。私たちが聴いてきたこと、感じたことを、私たちの言葉で伝えていくことに意味があるのだと心に刻み、活動していきたい。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　大内育恵
分類	その他
プログラム名	グループ討議
日時・場所	2013 年 3 月 7 日　東北自治総合研修センター

グループ討議ではこのプロジェクトの目的でもある、大規模災害時のソーシャルワークあるいはソーシャルワーカーの役割と機能について、またソーシャルワーカーだからこそ出来たことに焦点を当て、先生方も交え 3 つのグループに分かれ討議を行い、発表をした。

まず、どのグループでも真っ先に挙げられた機能は、連絡・調整機能である。色々な場所に赴き、住民同士をつないだり、医療と福祉をつないだり、様々な分野をつないでいけるというのはソーシャルワーカーだからこそ出来ることである、という意見が挙げられた。ソーシャルワークは生活支援であるため対象とする範囲も広い。そのため提供出来る情報も幅広いからこそ、フォーマルな社会システムが崩壊し社会資源が限られている災害時ではそれが強みとなり、様々な分野で得た情報やネットワークを活かすことが出来る。例えば、あそこに世話焼きが上手な女性がいる、あの人に頼めばこれが出来る、などといったようにフォーマルだけでなくインフォーマルな資源につなげていくこともそういった情報を数多く持っているソーシャルワーカーだからこそ出来ることである。また、そのつなぐという役割を果たすためにまずは傾聴し、しっかりとアセスメントする力がなければ適切なサービスや社会資源につなぐことは出来ない。そこで法テラスの話が挙げられたが、弁護士は話をすることは上手いが、クライエントの話を聞き取ることは難しい傾向があるという。そういった時にソーシャルワーカーが弁護士とクライエントの間に入り調整していくこともソーシャルワーカーの専門性が活かせる場面であると考えられる。

また、ソーシャルワーカーは平時から日常的に要介護者や障がい者と関わっているため、災害時でも一人暮らしの高齢者や認知症の人がどこにいるかすぐに判断し、真っ先に安否確認に駆けつけることが出来る。これも普段から関わっているソーシャルワーカーだからこそ出来たことであったのではないかという意見も挙がった。生活支援はその人の価値観や大切にしているもの等も含まれるため、初対面の人には分かりにくい。この人は本当は辛いけれど無理して我慢してしまう性格の人だとか、周りに気を遣って自分を犠牲にしてしまう人だとか、ソーシャルワーカーは普段から関わっているからこそ、初対面の人では「大丈夫です。」と言えば終わってしまい、埋もれてしまうところのニーズに気づけ、他職種に代弁することが出来る。ソーシャルワーカーは潜在的ニーズをいかに見つけそれを掘り起こし、代弁してつなげていけるかが重要となると考えられる。

被災地といってもその地域によって被害の大きさは異なる。内陸部の津波が来なかった地域の人も被災はしているが、“沿岸部の悲惨な状況と比べたら自分たちも被災者なんておこがましくて言えない”という人がいる。確かに甚大な被害を受けた地域と比べたらそれほど被害は大きくないかもしれないが、実際に被害に遭い生活に困っている。例えば、そういった方々が支援物資を受け取りやすくするために、第三者であるソーシャルワーカーが“この人も困っていている”ということを他の機関に働きかけ、自分では訴えられないニーズを代弁者として伝えていくことも災害時のソーシャルワーカーの重要な役割である、という意見も挙げられた。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　黒住香子
分類	その他
プログラム名	グループ討議
日時・場所	2013 年 3 月 7 日　東北自治総合研修センター

プロジェクトの最終日、現地視察からインタビューまでのこれまでの全てのプログラムを踏まえて、教員を含めた 5 名前後のグループに分かれてグループ討議を行った。テーマは、「災害時、ソーシャルワーカーだからこそできること」についてであった。各グループから出された意見の中で、私が最も印象に残っている 2 つの意見を紹介したいと思う。

まず最初に印象に残ったのが、「平時から多くの人とつながりを持ち、顔の見える関係を築いておくことで、災害時フォーマルな資源が壊れたとしても、インフォーマルな資源で対応できることもあるので平時からの人とのつながりが大切だと感じた」という意見だった。その土地に住み、その土地のことをよく理解しているソーシャルワーカーだからこそ、こうした役割を担うことができると思った。またソーシャルワーカーは、普段から障害者や要支援高齢者などと深いかかわりを持っている。そして災害時の混乱した状況においては、弱者と呼ばれる彼らの声は埋もれてしまう。彼らと普段から接しているソーシャルワーカーは彼らのことをよく理解しており、彼ら一人ひとりの状況や特徴に合わせて、フォーマルな社会資源が機能していない混乱した状況の中で、インフォーマルな社会資源を活用しながら支援を展開することができると考える。

次に「震災直後において、福祉は 2 番手だとインタビュー先の方が仰っていたけれど、医療ニーズのない人もいるから、必ずしも福祉は 2 番手ではないと思う」という意見も出されていた。確かに震災直後は、医療的な援助を必要とする方が多く存在するが、被災者全員が医療の援助だけを必要としているのではない。家が倒壊して生活の場がなくなったり、大切な誰かを

亡くして心に大きな傷を負ってしまったけれど、身体的には負傷していない人もたくさん居る。そのような人たちが必要とするものは、医療の援助ではなく福祉の支援である。震災直後においても、福祉の支援は重要な意味を持っているという思いからこの意見は出された。

グループ討議の最後に、このプロジェクトに対する振り返りが行われた。振り返りの中では、被災地で目の当たりにした震災の爪痕を思い出し、涙を流す学生もいた。またこのプロジェクトメンバーの中で唯一の東北出身の学生は、「皆、自分が被災するなんて思っていないから、震災が起こったときのために準備している人は少ない…」と防災の重要性について涙ながらに語っていたのは印象的であった。

ソーシャルワーカーの声プロジェクトはこれで終わり、次に語り部プロジェクトへと引き継がれていく。次のプロジェクトでは、声プロジェクトを通して知ることのできた被災地の状況、またインタビューを行う中で少しずつ見えてきた災害時のソーシャルワーカーの役割を一人でも多くの人に知ってもらえるよう、全力で伝えて行きたいと強く思う。

Ⅳ　学生コメント

関西福祉科学大学

黒住香子
　「何もできなかった」という言葉に重みを感じました。でも、インタビューしていくうちに、ソーシャルワーカーの想いや役割、また災害時どれだけソーシャルワーカーは必要な存在なのかということに気付く事ができました。現地で聞いたこと、感じたこと、考えたことを一人でも多くの方に伝えていきたいと感じました。

篠原拓弥
　ソーシャルワーカーの声を聴き、自分もソーシャルワーカーになりたいと強く思うようになりました。また、このソーシャルワーカーの声を多方面に発信していくことが私たちの使命だと感じました。そしてこのプロジェクトは継続していかなければならないので、後輩にしっかりと引き継いでいこうと思います。

植田美悠
　インタビューを通じて、自らがソーシャルワーカーという職業を目指していることを誇りに思うことができた。

寺田茉莉子
　災害直後、ソーシャルワーカーはあらゆる人に寄り添い、命や生活を守っていた。しかしインタビューを行う中で、ソーシャルワーカーたちは多くの葛藤を抱えていた。私たちはこれからも支援者の支援に繋げる活動を続けたい。

泉綾子
　昨年に続き、宮城で活動をしました。沿岸部に人の姿は見えないけど、復興車両が行き交う町を通ってワーカーさんが色んな人の支援に向かっていることを想像すると、心強い存在だと思います。悩みながらも静かに寄り添い続けるワーカーさんの声やおもいを後輩とともに伝えていきたいと改めて思いました。

淑徳大学

大内育恵
　震災発生当初、自らも被災しながら自分に出来ることを懸命に果たそうとしたソーシャルワーカーさんがいます。その方の話を実際に聴くことができ、改めてソーシャルワーカーの仕事に魅力を感じました。震災がもたらした被害や、被災地の声を伝え続け、一人でも多くの方の考えるきっかけ作りをこれからも続けていきたいです。

大藤未来
　ソーシャルワーカーの声プロジェクトに参加し、被災地の現状や災害時のソーシャルワーカーの働き、被災地の方々の想いを直接感じとることができました。これからは、現地で感じたこと、見てきたものを“伝える”という私達の役割を果たしていきたいです。

山口恭平
　このプロジェクトを通じ、自分たちには被災地の為にやるべきことがまだまだあるということを実感しました。また、被災地支援と並行に、東日本大震災での出来事をもう繰り返さないように私達が自ら先陣を切ってこの出来事を声として他の学生、または一般の人々伝えていくことが、私達の役目だと感じました。

三島木大樹
　このプロジェクトで他大学の学生の福祉に対する強い意志や夢への志を見たこと、またインタビューを通じ震災に直面したソーシャルワーカーの方々の気持ちや行動を聴いたことで、私はソーシャルワーカーを目指す一人の学生として成長していきたいと思いました。これからはこれらの経験を他の学生に伝えていきたいです。

中部学院大学

石川智也
　被災地・被災者と言ってもその一言で一括りにはできない、様々な思い、現状を目の当たりにした気持ちです。我々、学生の立場で伝えていくためにも、勉強が必要だなと痛感する思いであります。ソーシャルワーカーって何だろなぁ…。

原恵理菜
　ソーシャルワーカーの日常的な業務の中で生まれた“つながり”が、災害時に発揮されるのだと思った。つなげて終わりではなく、見守り・関わり続けていく大切さも見えた。災害を特別視せず、地域の人々とのコミュニケーションを日々積み重ねていくことが重要だと思う。専門職として、他の職種につなげる“架け橋”は日常でも災害時でもなくてはならないものだと再認識した。

古川友子
　宮城では、沿岸部の大きな被害を受けた人たちに隠れて、内陸部で助けを求める声を上げられなかった人々の声を聞いた…
　支援に行っても、沿岸部と内陸部での被害の差・ギャップを感じ、苦しんだ人々がいた…
我慢強い宮城の人々の想いに触れ、複雑な気持ちになった。
　月日が経つごとに薄れてしまう意識の中で、今私たちにできることは何なのか？一つずつ考え、動いていきたい。

古田陽亮
　大災害のような緊急時には、人と人との繋がりが多くの支援に繋がるのだろうと感じました。そのなかでソーシャルワーカーは、生活環境を調整することやこの先、未来を支えていく存在なのだろうと思います。被災地へ行き、お話を聞いて感じるものはたくさんありました。

第 3 次派遣　メンバー

大学名	学年	氏　名	備　考
関西福祉科学大学	教員	遠藤　洋二	復興支援委員長
	教員	家髙　将明	
	3 年	泉　綾子	
	3 年	寺田　茉莉子	
	3 年	篠原　拓弥	
	3 年	植田　美悠	
	3 年	黒住　香子	
淑徳大学	教員	米村　美奈	
	職員	松崎　滋	
	3 年	大藤　未来	
	3 年	山口　恭平	
	3 年	三島木　大樹	
	3 年	大内　育恵	
中部学院大学	教員	大藪　元康	
	3 年	石川　智也	
	2 年	古田　陽亮	
	2 年	古川　友子	
	2 年	原　恵理菜	

福祉系大学経営者協議会
ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト
第３次派遣報告書

平成 25 年 11 月
プロジェクト事務局　関西福祉科学大学
〒582-0026　大阪府柏原市旭ヶ丘 3 丁目 11 番 1 号
ＴＥＬ：072-978-0088(代)
ＦＡＸ：072-978-0377(代)